

平成26年（西暦2014年）11月

**瞑想録（そのプレ2）**

（2009年4月から2011年6月分）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」と言う立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2009. 04. 17 189

**1、契約主義と日暮硯**

米国はご存知のように、自由主義の国である。加えて民主主義の国でもある。そしてその実態は極度に契約至上主義の国である。その米国の、自由の範囲において発生した投資ファンドが、やはり自由の範囲に於いて考案された金融工学の諸方法を用いて、合法かつ合倫理的に行った「サブプライムローン」が「不幸にして」破綻して、その結果世界は大迷惑している。

しかもその結果、何百万人もの労働者が職や家を失っている真最中に、その貧しい人たちから集めた税金を注入された会社が、その注入金をお手盛りで山分けして、100人近い元幹部たちが1億ドル以上の退職金を平然と頂き、それも「契約どおりです」と、良心の呵責も感じず日常茶飯事のごとく当然で居る。

これが果たして本当の、つまり血の通った人間主義の自由主義・民主主義であろうか。自由主義の理想は、そもそも王政から自由を勝ち取った人々の志を紐解けば分かる

## 瞑想録（そのプレ2）

ように、人一人ひとりを奴隷から開放して、真の平等をもたらすためにあった。ところが今は形式だけが残って、「契約です」と言えばあたかも水戸のご老公のご印籠のようになっている。

日本の江戸時代にも、呼び方は違えども契約（約束）もあったし貨幣経済もあった。ここで西武グループ総帥であった堤清二氏が「これぞ経営の手本」と絶賛した「日暮硯」（ひぐらしすずり）を紐解いてみよう。舞台は江戸中期、信州松代藩である。

ここの家老であった恩田木工（もく）は、藩の財政の困窮と農民の過酷な税搾取を見て、先人たちの「改革」の失敗を踏まえつつ打ち出したのが、一種の徳政令であった。つまり、これまでの非人情的な取立ての慣習は一切廃止する。そして制度を緩和する代わりに、今までの税の既納未納や、債権債務はすべてチャラにしようという提案であった。

もちろん藩の民の中には、既に次年度の税金を納めた者も居れば昨年度分すら未納の者もいる。債権を保有する商人もいれば債務を負った武士もいる。みなさままだあったわけだ。

そしてこの提案には、債務者や未納者が喜んだのは当然としても、債権者である商人や、既納者である豪農たちも、「不公平だ」と文句を言うどころか、「何とお心のこもったありがたいお沙汰であることか」と涙を流して喜んだという。

私はここにこそ本当の自由主義、民主主義、人間主義、博愛を感じる次第である。真の民主主義、契約主義は実は日本にあったのである。それに比べれば米国の自由主義・契約主義は硬直している。米国の工夫のなさや民度の低さにはあきれるばかりである。

## 2、スーチャーさんは東洋人？

いきなり「スーチャーさんは東洋人？」と疑問を呈したが、彼女の人種上のアジア性を疑っているわけではない。ではなくてその中身、ものの考え方を尋ねているのです。彼女は軍の独裁政権と戦って、その勇気は立派に思うけれど、そういう人に失礼かもしれないけれど、彼女のキャンペーン手法にアジアの匂いが全く感じられないのだ。

旦那は英国人だし、支援者もむしろ欧米に多い。そして彼女のレジスタンスのやり方もなにかスタンドプレーと言うか、ゲーム感覚というか、100%欧米的にしか見えない

のだ。もちろん国際世論を喚起することは重要な戦略の一つではあるのだが、問題自体はむしろ国内問題である。

それに対しあたかもサッカーでオフサイドを取っているにも似る彼女の手法にミャンマーの民衆は本当に精神的な連帯を感じているのだろうか。彼女一人が浮いては居ないだろうか。

欧米人は所詮自分のことしか考えない。あたかも靖国訴訟の共産党系弁護団のように、ちょうどつてつけの訴訟原告人を掘り出ただけで、その本心・目標はあくまでも自己思想の実現であり、原告人は単に言い訳、傀儡にすぎない。

これはかつて欧米列強がアジアを植民地にしたときと極めて似た独善的な発想であって、いわば余計なおせっかい、極言すれば羊の皮をかぶった狼だ。そしてスーチーさんは、見掛けは黄色いけれど中身は白い「バナナ」だということになる。

かたや東洋的な、民衆の連帯を勝ち得た戦い方をしている人に、チベットのダライラマがいる。もちろん彼にも欧米系の支援者は居るが、それには振り回されていないし、チベット人も僧侶たちがともに立ち上がったたりして民衆と精神的な連帯がある。

この土着的な連帯がもしスーチーさんにないとしたら、彼女を拘束しようとしている軍部も、実は半分外人部隊と戦っているわけであって、一分の理があると言わねばならない。

### 3、技術よりも人口だ

私は敢えて予言しますが、人類は人口問題で滅亡します。インフルエンザでも大恐慌でも、戦争でもないです。科学技術の進歩とその結果としての人口爆発によってです。

人類は今までの歴史において何度か、画期的な技術革命を成し遂げてきました。特に大きいのは鉄器の製造と農耕文化でしょう。これらの技術は人類の持てる可能性と、対環境の働きかけの可能性を飛躍的に増大させました。これらほどではないにしても蒸気機関による産業革命とか、それに続く科学技術の、一種流行としての発達と職業化、これらはコンスタントに人の可能性を広げてきました。

実際これらの技術の発達により、人類の生活レベルは飛躍的に向上し、今や平民であつても自動給湯器やクーラーや車は当たり前になっています。すべて科学技術発

達のおかげです。

でも少し待ってくださいよ、科学技術の発達の成果のうち、これら個人単位での生活レベルの向上は一人ひとりが肌身で感じていて分かりやすいのですが、科学技術の発達をもたらした「恩恵」は利便のみでしょうか。技術の発達と人口増加の関係をちょっと調べれば分かることですが、技術の発達は生活レベル向上以上に、地球上の可住人口の増加のほうにはるかに使われています。

つまり科学技術が発達するたびに、人類と言う愚かな生き物は、その技術が許す限度目いっぱいまで節操なく人口を増やし、その増えた分は「地球と言う桶のたが」をその限界まで際限なくまで増やすがゆえに、その結果人口の増分は多分に、「住めるけれども劣悪」な環境での居住を余儀なくされ、そしてこれに対し「人道的立場」から、これら劣悪な住環境を改善するために再度技術開発がなされ、それがまた地球のたがをさらに広げると言う悪循環を重ねています。この悪循環に対し人類は打つべき手立てがありません。それどころか、人口について語ることは、ナチの蛮行以来特にタブーとされているため、打つ手を考えようと言う機運すら全くありません。

ここまで読めばお分かりでしょう。無計画な技術発展は今やむしろ悪なのです。「埋めよ、増やせよ、地に満てよ」とか「発展は神の国が近づいたこと」などというプロテスタントの愚かな信仰は、地球を破壊する害毒の根っこ以外の何物でもないのです。今ここで一歩立ち止まり、技術発展を一旦辞めて、「技術が発展しても人口増加に垂れ流さない方法」を考えるべきです。これは他のいかなる使命よりも最優先の急務です。

#### 4、会社は儲けるだけか

会社は儲けるためにある。これ当たり前ですよ。ときに会社がスポーツチームを保有しているとか、地域のメセナ活動のために身銭を切ることもありますが、これらだってあくまでも会社宣伝の一環、ひいては儲けるためにあるわけです。会社は営利法人、これは常識です。

では会社は単に儲けるためだけにあるのでしょうか。欧米的な単細胞的経済(数値)至上主義ではそうです。ところが日本はそうではなかった。岩崎弥太郎の三菱グループが、いわば国策会社として、一定の利益は得つつも国家反映の一翼を担ったことは良く知られています。

日本はこうやって、会社の概念を土着・拡張して、私企業単独の儲けだけでなく国家

繁栄の一翼として積極参加させ、有機的に活用しました。満州経営を担った南満州鉄道、千島樺太の運営を担った王子製紙や北拓銀行が良い例です。そもそも軍隊だけで民の掌握といった細部まで手が回るわけがない。その部分を会社と言う偽装で行いました。人事的にも多分に交流していました。

さて、同じ「会社」とは言いながら、上記2例のどちらのほうが賢くて、融通無碍で、かつ全体利益に寄与するでしょうか。答えは明らかですね。これら事例の教訓は、「既成概念」とらわれずに、外来概念も土着化させて工夫を加え、原形をとどめないほどに付加価値をつける懐の深さが、長い目では勝利するということです。

この視点からいわゆる小泉改革を見てみましょう。小泉さんは日本にも欧米流の競争原理を本格導入しようとしてしました。その結果生まれたのがホリエモンのような若き経営者たちでした。でもそのホリエモンは、競争力にしがみつくと余り、うそで固めた虚飾で倒れ、他方では多くの派遣労働者が、その人たちの過失ではないのに、社会から零れ落ちました。

小泉さんがやったことがすべて間違いだったとは言いません。でも今となっては多分に「こうなっちゃいけない」という反面教師であったに過ぎません。小泉さんは、「欧米流の競争方式は日本にはなじまない」と言うことを国民の骨身にしみさせるために、一度は出現すべきだったのでしょうか、一度で十分です。そして小泉さんら今の政治家に比べ、明治の元勳たちがいかに偉大であったかを我々に再認識させてくれました。

## 5、共産党信条

共産主義の実態は「マルクス・パウロ教」とでも呼ぶべき低級の一神教であり、いわゆるキリスト教、内容的には「パウロ教」と双子の兄弟であることは既に何度も述べていますが、今日はこの証拠のひとつとして、「共産党信条」を掲げます。全員起立の上斉唱してください。

我は信ず。共産主義はキリスト教の突然変異によって宿り、マルクス・レーニンによって生まれ、トロツキストによって苦しみを受け、ソ連崩壊によって死にて葬られ、毛沢東主義で生き残り、地域紛争でよみがえり、原理主義に昇り、絶対なる科学哲学最高神の右に座し給える。かしこより来たりて反革命分子に怒りの鉄槌を下さん。我は共産主義を信ず。世界同時蜂起を信ず。聖なる普遍の真理、世界同時革命、そして最終形たる共産主義世界独裁政権の確立を信じる、アーメン。



偉大なる毛沢東同志は言いました、「キリスト教の前に東洋思想など張子の虎である」と。キリスト教の免疫がない東洋の国中国に共産主義が蔓延すると、限度や手加減や際限がないので、行くところまで行ってしまいました。そしてその極端な毛沢東主義は、南米やネパールやアフガニスタン等にも飛び火し、豚インフルエンザの如き猛威を振るっています。

## 6、蓋然論理と利発さ

蓋然論理はその実態を知恵の有無で判断するために、論理発案者の利発さは、実質上大いに関係する。ただしここで言う「利発さ」とは、ペーパーテストの点数のようなものではなく、物事の本質に対する洞察力と、その結果の簡潔にして要点を突いたまとめ方にある。例として「日蝕」で最年少の芥川賞受賞者となった、平野啓一郎氏の発言をいくつか引用してみる（引用元：世田谷文学館ニュース第41号）。

### ・現代文学について

「単なる役割と本当の俺のような、ポストモダンの頃には否定されていた考え方が、今度は社会ダークニズム的な新自由主義的な風潮が蔓延して、自己責任論になってきた。」「ドストエフスキーも最後には過激なスラブ主義者、ニヒリストになって、皆最後まで分かり合えないまま破滅していく青年たちを描いている。」

### ・最近の「誰でも良かった殺人」について

「カミュの『異邦人』で主人公が言った『太陽のせいで殺した』と言うセリフよりは、自分の不遇は構造的な問題だという自分なりのロジックがあって、そのシステムを破壊しないと社会に訴えられないと考えている。」「動機が分かりやすすぎる場所があって、それが逆に怖い。」「その世界観を言葉で作れば作るほど、ますます自分ががんじがらめになってしまうという構造がある。」

### ・文学論について

「今の世の中を生きていて余り矛盾を感じない人は、そもそも文学を読む必要がないのではないか。文学は世の中と適合しない自分があるという人のためのものだ。」

引用なので脈絡が分かりにくくなっていますが、この人の発言は時代や文学の諸相を、無駄なくかつ余すところなくえぐっていると思います。鬼才ですね。広い意味での蓋然論理は、こういう世界も的確に扱えないといけなと思っています。

## 7、メーカーを必死で弁護する客

一般に米国人は口先の理屈ばかりに拘泥する。そう権利意識が強いわりに、食料の賞味期限に非常に鈍感だ。というかほとんど見ていない。私が米国に駐在していた頃の話をも2つ出します。

ある日本食料品店でホワイトのおばさんが、賞味期限を半年も過ぎたカレールーを買っていたので、おせっかいとは思いながらもそのことを指摘してあげた。するとそのおばさんは、やれ半年などどうということもないだの、以前も同じように期限切れのものを買ったけれども味や質に全く問題はなかっただの、まるでそのメーカーを擁護しているとしか思えない屁理屈を百曼陀羅も並べた後、私に「自分に賛成するか」と迫った。私はもう面倒になったので賛成の意を伝えると、そのおばさんは満足して帰っていった。

このおばさんが実は自分の選択の正しさについて一生懸命自己弁護していたのは分かっていた。でも言い訳の数々は、日本人のセンスならば、メーカー擁護あるいは販売店擁護にしか聞こえない。感性よりも実態よりも理屈が先行する米国人らしいと思った。

また別の日、別のホワイトのおばさんが、トーフのうまさを絶賛してくれた。日本食を通じて日本を持ち上げてくれているらしかった。でも良く話を聞いてみると、「トーフは酸っぱくてうまい」とか「チーズのような香りがした」とか言っている。

このおばさん、どうも日本流に言えば腐った豆腐を食べたらしい。その後腹痛がしなかったか聞いてみたら、「多少あった」と言う話、「それは腐っていたのだよ」と教えてあげると、そのおばさんは顔を真っ赤にして「いやあれは良い味だった、あれで良いのだ」の繰り返し。決して自説を曲げない。挙句の果てに今度自分の豆腐料理に招待してくれるなどと言い出す。勘弁して欲しいよね。

ここにも実態よりも理屈を優先するおばさんがいる。ごく普通のどこにでもいるホワイトたちだ。良くも悪くもこれがアメリカ人というものだ。

## 8、鈴木宗男を解き放て！

元自民党で今は新党大地の、起訴済み有罪判決上告保釈中の政治家鈴木宗男氏、私は別にこのセンセーを尊敬なんかしていない。顔つきもやることも今一馬鹿っぽい

## 瞑想録（そのプレ2）

し、潔さも頭の切れも感じられないし大物らしさもない。むしろ風采の上がらない吉本所属の二流漫才師と言った感じだ。

ただ今このタイミングは、鈴木センセーの得意分野が極めて危機的状況にあるのだよ。だからとりあえずこのセンセーを解き放って、自由に活躍させてあげてくれないかな。この人の逮捕は、この人が日本のものを取り返して成果を上げてからすれば良いだろう。「日本のもの」すなわち北方領土だ。北方領土に関して今のロシアとまともに駆け引きができるのは、鈴木宗男だけなのだよ。

北方領土は、今は軍事的重要性が低くなったが、その代わりに、火山性の地形の常で、鉱物資源や水産資源さらには観光資源の無尽蔵の宝庫なのだ。つまり日本の宝なのだ。それ以前に明確に日本の固有の領土なのだよ。エリチンのころは金で買い戻せそうな雰囲気もあったが、今はまるでダメだ。

去年のガソリン高騰のドサクサで儲けたオイルマネーをたっぷりつぎ込んで、今ロシアは北方4島のインフラ整備を強力に進めており、このままでは北方4島は既成事実的に取られてしまうのは緋を見るよりも明らかになってきている。最近のロシアのクリル上層部の態度はいつになく強気だ。こういう時は品行方正な官僚さんたちの上品外交では歯が立たない。土地の分捕りには野武士たる鈴木宗男センセーのゲリラ力こそが武器になるのだ。

たしか「ムネオハウス」を告発したのは共産党だったよな。あの党、いつまでロシアの手先の非国民をやっていれば気が済むのだ。どうせ裏でロシアから情報を仕入れたに決まっている。それを日本と言う国も、変に法律の細かいところに律儀になって、総合的国益を考えることがまるでできなくなっている。

明治維新の頃とは大違いだ。日本もつまらないところだけ西洋かぶれして、ずいぶんと胆力のない国に成り下がったものだよ。もっと融通無碍にやらないと本当に国を滅ぼすよ。

だいたい政治に金がかかるのなんて常識だし、明治の元勳たちも一方ではかなり強引なことをしてきた。例えば山県有朋、切腹ものの大犯罪をやっておきながら（越後屋事件）、他方では国のためにずいぶん強引に寄与して、臣下では最高の「大勲位」を得ている。でもそのおかげで独立国たる日本があるのではないか。政治なんて山っ気がないとできない。



同じことが小沢一郎にも言える。あれだけの懐の深い梟雄、天才的軍人をつまらないことで足を引っ張って、日本も平和ボケもいい加減にして欲しい。もっとこいつらをうまく使えよ。こう日本がだめになったのも、元はと言えば戦後の進駐軍の偏向教育のせいだが。

## 9、カルトとは

悪質な新興宗教、いわゆるカルトの特徴を挙げてみた：

- 1、教祖に対する絶対服従、
- 2、ハルマゲドンとかによる脅しつけ、
- 3、献金の強制、
- 4、理性と素朴な心の蹂躪とマインドコントロール、
- 5、排他的で独善的な教理。

この辺だろうか。

ここまで書いてみて気づいたのだけれど、これってキリスト教、それもエホバとかモルモンとかの最近のものではなくて、宗教改革で誕生した、いわゆるプロテスタント、そのマンマじゃないですか。そうか、キリスト教こそ元祖カルトだったのだ。そういえばオーム真理教のように東洋系の新興宗教も、管理運営のやり方はキリスト教からちゃっかり頂いちゃっているものね。

人民寺院等のカルトが社会問題化した欧米では、義務教育のうちにカルトを見分ける授業をしているそうだけれど、元祖カルトたるキリスト教の息の根を止めない限り、根本治療にならなくて、今後もいくらかでもカルトは出てくる。この点に気づいて欲しいね。

2009. 08. 12 167

## 10、就活は化かし合いだ

人間だれでも一度はやらないといけない就職活動。これの基本は絶対に本音を出さないこと。面接を受けるほうも審査するほうも、両方です。審査官だってどうせ受験者が本音なんか言うなんて思っていないし、むしろこういう場面で平気でばれないウソをつける程度の能力と度胸はあってほしいと望んでいるほどなのだよな。では面接の様子を見てみよう。カッコ内は内心です。

受験者：コンコン。失礼します。

## 瞑想録（そのプレ2）

審査官：どうぞお入りください。

審査官：どうぞお座りください。まずお名前と所属をどうぞ。

受験生：丸野角彦、西洋学院大学法学部3回生です。（そんなこと履歴書に書いてあるじゃないの。ガキじゃあるまいし復唱しろかよ）

審査官：なるほど、そうですね。（三流大学のくせに良くうちなんか受けるよ。それに発音の歯切れが悪いな。）

審査官：当社を受験された同機を簡潔に述べてください。

受験生：はい、御社の積極的な経営戦略と、業界でのリーディングカンパニーであることに魅力を感じました。（単に寄るなら大樹の陰ってことよ。もぐりこんじゃえばあとはそれなりにやっていればいいものね）

審査官：なるほど。もう少し具体的にお願いできますか。（この辺でぼろを出しちゃえよ）

受験生：ええと、そうですね。ううんと……。良く新聞やテレビで話題になっています。（くそ、変化球で攻めてきやがって。性格曲がっているじゃない？）

審査官：ところであなたの大学生活で、何か特筆すべき活動はありましたか。（この程度の質問は想定内の範囲さ。これを梃子（てこ）にこっちのペースに持ち込んでやれ）

受験生：はい、格闘技クラブの副主将をやりました。体育会系です。（本当は3回生になって就活のためにちょっとやっただけだけど、ここは針を棒のように言っておこう）

審査官：体育系サークルの副主将ですか。それなら上下関係とか礼儀はわきまえていますね。（サークル名が嘘っぽいな。どうせ就活用の名前だけのサークルだろう）

受験生：はい、礼儀と先輩関係は叩き込まれています。それに副主将の立場で人間関係も苦労しました。（主将以外全員副主将だったのだよね、ハハハハ）

審査官：そうですね、それではあなたはわが社に入ったら、どのような貢献ができるでしょう。（もういい加減に面接なんか切り上げて、パーっと飲みに行きたいぜ）

受験生：はい、大学では法学を学んでいますので会社全体を法律面から支えるとともに、サークルの経験を生かして部門間調整、円滑な業務遂行に寄与できると思います。それに希望としては新商品の開発を手掛けて、御社の新たな収益の柱にしたいと思います。（就活本のマンマだけど、すらすら言えたから好印象だろう）

審査官：新商品の開発は大変ですよ。何か具体策でもあるのですか。（アイデアだけ頂いてしまえ）

受験生：えーと、えーと、商品はネーミング一つで売れ行きがずいぶん違ってきますので、その意味では、象牙の塔に閉じこもらずに萌えとか最近のアングラ文化も体験してきましたので、えーと、えーと、庶民に近い感覚も豊富です。（くそ、何を言っているのか、自分でも分からなくなってしまったぜ。不覚だ）

審査官：（尻尾を出したな、この遊び人。この辺で失格を覚悟させておけ）アングラねえ、うちのコーポレートイメージとはちょっと違うような気がします。

受験生：あー、うふああ、あの一、はあ、いえいえ、何と言うか、これからはむしろ、従

来の型を破るような大胆な発想こそが大切だと思います。（ひええ、危ないところだった。うまく切り返せたかな）

審査官：そろそろ時間が来たようです。今日はどうも御苦労さんでした。（もう来るな）

受験生：こちらこそありがとうございました。御社以外は考えておりませんのでよろしく願います。（むちゃ疲れたけど、次の面接に行くか。所詮は数で勝負だよ）

## 11、婚活は化かし合いだ

就活と並んで人生の大転機となりうる婚活ですが、これがまた、キツネとタヌキの化かし合いです。典型例としてお見合いの場面を以下に載せます。カッコ内は内心（本音）です。

男性：はじめまして。猪野鹿男と申します。三菱物産の北米一課所属です。

女性：はじめまして。犬飼小鳩です。素晴らしいところにお勤めですね。（いきなり何気ない自慢ね。まあいいわ、「3高」は望むところだから）

男性：そんなことないです。それより今日はあなたにお会いできて幸せです。ところで僕って運命を信じるのですよ。（結構グラマーだ。一応俺の好みだな。後は頭の中身か）

女性：そうなのですか。私も占いとか好きですよ。ご趣味もそのほうですか？

男性：いえ、趣味はテニスです。慶応大学在学中は同好会に入っていました。

女性：（また何気ない自慢、ちょっと鼻につくわね。それにテニスって一時代古いじゃない）まあ、ずいぶんとスポーツマンでいらっしゃるのね。

男性：はあ、一応文武両道をモットーとしておりますので。ところで犬飼さんのご趣味はなんでしょう。

女性：ちょっと平凡なですけど、お茶とお花を少々。あと料理が好きです。（マージャンとロックバンドのボーカルなんてちょっと言えない雰囲気ね）

男性：僕古風な女性が好きなのです。母からもそんな女性を勧められています。

女性：（この人もしかしてマザコンかしら。だとしたら気をつけないと）まあ、お母様と仲が良いのですね。

男性：はあ、僕から言うのも何ですが、よくできた母なのです。

女性：（何よ、それ。ひょっとして幼稚なうすら馬鹿？）そういう意味では私も父を尊敬しています。

男性：犬飼さんは旅行なんか好きですか。僕、ドライブが好きなのです。スポーツカーを転がしています。

女性：（またまた古典的な。もう飽きてきたわ）あら、それは家庭サービスの良いパパになれますわね。

男性：そうですか、犬飼さんにそう言ってもらおううれしいですね。自分でもそんな気がしています。ところで犬飼さんは大学で仏文学を専攻されたとか伺いましたが。（頭の悪い女と結婚するとできる子供まで頭が悪くて苦勞するからな。程度を見ておこう。）

女性：はあ一応、フランソワーズ・サガンについて研究して卒論にしました。

男性：ほう、どんな内容ですか。

女性：（しつこいわね）サガンは当時革新的な思想を文学で表現して世間を驚かせたのですけれど、彼女は一般に言われているような悪女でもなければファザコンでもなくて、むしろキーワードに“アンニユイ”と“デカダンス”を設定することにより、彼女の心境をより素直に解釈できるというものです。一応推薦されてフランス留学もしてきました。

男性：（IQもそえなりに合格みたいだな）素晴らしい、あなたとは素晴らしい家庭が築けそうな気がしてきました。

女性：（もうこの男、薄っぺらでつまなくて、しかも世間体や聞こえだけということがはつきりしたわ）今日は楽しいひと時をどうもありがとうございました。とても勉強になりましたことよ。（もう勉強なんてこりごり。つまらない）

男性：私も楽しかったです。今度一緒にドライブに行きませんか。（短期決戦だ）

女性：お返事はこの後で、しかるべき筋を通してということではよろしいですか。（もちろんお断りだけど）

男性：ああ、仲人さんね。もちろん結構です。良いお返事をお待ちしています。実はね、僕ひそかな自信があるのですよ。

女性：はあ、自信ですか。ではどうもありがとうございました。（もう永遠にさよならね。目つきも今一じろじろいやらしかったし。たまたま電車で一緒になっても知らん顔するのよ）

## 12、キリスト教を踏み台にした快傑・宋嘉樹

日本でいえばちょうど明治時代ころに生きた中国人で、宋嘉樹という人物がいる。日本ではほとんど知られていないが、「宋三姉妹の父親」と言えば分かる人も多いだろう。宋三姉妹とは、映画にもなったが、長女の宋靄齡は大財閥の当主孔祥熙と、次女の宋慶齡は中国革命の父孫文と、そして三女の宋美齡は後の中華民国総統蒋介石と結婚し、「一人は金と、一人は権力と、一人は国家と結婚した」と言われたその三姉妹の父で、清国末期から中華民国にかけての政商である。

彼は若いころ中国派遣米国人宣教師のもとで受洗し、キリスト教徒となった。そしてその働きが目覚ましかったので推薦により米国に渡り、米国キリスト教会の多大な援助を受けて米国の大学で神学博士号を取った。当時の欧米キリスト教業界には、もっと

現地人の指導者を養成すべきだという運動があったためだ。

そして博士号取得後ただちに中国に、新任宣教師として派遣されたが、間もなくその職を辞して事業を始めて、大成功を収める。そして娘たちと息子たちを財力で米国に留学させる。そして娘たちは、米国で養った広い経歴と見識により、三姉妹全員が中国や世界に強い影響力を持った人物たちとの結婚をもたらし、世界史に名をとどめることとなる。

三姉妹の映画は、かつて日本では岩波ホールで公開されて結構な集客をした。その映画では宋嘉樹は、宣教師は辞めたけれども棄教はしなかった敬虔な信徒のごとく描かれているようだが、娘たちが語ったその人物像は全くの反対で、宋嘉樹はそもそもの初めからキリスト教などこれっぽっちも信じていず、単に米国に渡って人脈を作るためにキリスト教を踏み台にしたにすぎないという。

三姉妹によると実際の話は、米国についたその夜に忽然と姿を消して、10年後に暗黒街の一角（ひとかど）の人物として中国に密入国して戻ってきたと言う。そして当初からの計画通り実業家の道をまい進している。子どもたちが生まれた30代頃には家にもはや聖書の一冊もなく、娘たちも父親が天主教について語ったことを、ただの一度も聞いたことがないし、聖書を読むように勧められたことも全くなかったという。

この証言が真実だとすれば宋嘉樹という男、実は西洋の侵略の提灯担ぎの二枚舌で親切ごかしのキリスト教を、返って嘲笑うがごとく単なる踏み台として利用した、東洋人としてなかなかあっぱれな快男児だということになる。そして、こういう肝の据わった男からは、やはり世界史を動かすような子孫が出るのだ。

実際、なんだかんだあっても、中国は欧米列強の植民地になることはなかった。そしてその陰には、日本の明治維新を見てもわかるように、ある意味やくざ的な目利きの愛国者たちの存在があったのだ。現にこういう肝の据わった奴らがいなかったフィリピンなどは、卑屈にも、占領国が押し付けた、言わば親の敵のキリスト教に「へーへー」して、極めて民度の低い国に堕している。ビルマもスーチーのせいで危ない。

鳩山さん、「友愛」なんてきれい事を言っていると、日本は外国に乗っ取られるよ。政治なんて鈴木宗男や小沢一郎のようなやくざがやるものだ。

### 13、コンクリのキリスト像が世界七不思議になった不思議



画像のキリスト像、足元にいる人々と比べればいかに馬鹿でかいかが分かると思うが、このでかいコンクリの塊が、なぜか「新・世界七不思議」の1つなだ。ブラジルのコルコバードというところに立っているのだが、単にでかいだけで、夜中に歩きだすとか、核実験をやると涙を流すとか、そういう気のきいた芸当は全くない。

はっきり言うが、「世界七不思議」を客観的見地から選ぶ気があるなら、こんなプロパガンダの塊みたいな怪物なんか選んでほしくないのだよね。世の中地球全部がキリスト教のものかい。こんなの選ぶのだったら、牛久大仏も、ソ連のレーニン像もみんな平等に選べよな。実際ほかの6不思議は、タージマハールとか万里の長城とかの超一級の遺跡などで、このキリストだけ異質なのだよ。

で、調べてみたら、専門家の選択とは別の一般投票の部分で、ブラジル国営放送が大宣伝を打って国民に投票を呼び掛けたいらしいのだな。呼びかける方もどうかと思うけど、投票する方も余りにも卑屈じゃないか。だってこの宗教は南米にとっては、自分たちを滅ぼした憎むべき征服者の象徴ではないか。キリスト教の奴らはインカの皇帝をだまし打ちで殺して、金銀財宝を全部持ち逃げした、言わば卑劣な親の敵みたいな奴らなのだよ。

それを卑屈にも「へーへー」言って拝んでいる、なんという愚か者たちだ。祖先を敬う気はないのか。先祖の敵(かたき)を打って、自分たち民族の固有の文化を復興させようという気はないのか。そういう「きん〇まなし」が多いから、キリスト教の宣教者とかいうごろつきがのさばるのだよ。はっきり言ってこれを七不思議に選んだ人たちには、不作為の罪がある。

2009. 10. 25 154

#### 14、教訓さえ残せなかった共産主義

去る10月1日は第60回目の国慶節、中国では大々的な軍事パレードが行われて、「共産主義革命の勝利」を世界中に喧伝していた。表面的な、力で抑え込んだ民族融和、ウイグルでもチベットでも、そして内モンゴルでも漢民族優位、漢民族拡大、伝統文化破壊をしながらの、「国民大同団結」、「民族融和」である。

中国がかような態度を平気でとれるのは、そもそもの悪しき中華思想、中国中心主義に加え、共産主義特有の、「革命のためにウソをつくのは善だ」、という非人道的な居直り思想がある。

ところでその中国の自信の源である経済の大成長、これは実は中国人民全員の合力によるものではなく、実は共産主義とは言いながらも大きく市場開放した結果もたらされた極端な貧富の差の、その一握りの資産家たちの成果である。平民のほとんどは富から置き去りにされたままだ。

似たようにして、プーチン首相のもとで再び超大国の野望をもやすロシア、この国の経済成長も、実は一握りの資産家によっており、国民の大半は貧しいままだ。

そもそもロシアも中国も、極端な貧富の差、農奴制とか小作人制度とかそういうものを放置した結果、共産主義という不完全なシステムを受け入れるスキを与えてしまったのではないか。そして国民全員が不自由な思いをし、何百万人と言う人々が異端審問の結果粛清されている。

その悪魔的なシステムである共産主義、ロシアも中国もやっとの思いでこれから脱したと思えば、その結果は元の昔の貧富の差社会が到来しただけ。これは一体どういうことなのだ。普通どんな下らないものでも、一度存在すればその教訓を残すものだ。しかるに共産主義は、あれだけ多くの犠牲を強いてなお、何の教訓も残していない。なんという低級なシステム、いや宗教であろう。

共産主義、私は「マルクス・パウロ教」と呼んでいるが、この実はキリスト教を徹底しただけのシステム、キリスト教の悪しき所、つまり建て前と本音の使い分けとか、尊大で鼻持ちならないところなどすべてをしっかりと受け継いでいる。

そしてそれに加えて、一神教特有の思考実験の結果としてのイデオロギー、人間の自然な感性をことさらに無視した創作宗教の部分、それ故に人類の心に全く根付かず、その存在が人類に何の影響も残せないところをそのまま引き継いだ、人に何らの感動も与えない、人間性のかけらもない、人間奴隷化宗教の実態を、この双子の兄弟である共産主義は、余すところなく再現している。

## 15、砂糖は辛い

本当ですよ、砂糖は辛いのです。間違っても甘くなんかありません。滅相もないことです。なぜかと言うと、「砂糖は辛い」と聖書に書いてあるからです。神の靈感によって書かれた、あの聖書に、「砂糖は辛い」と書いてあるのですから、これはもう絶対です。聖書様に逆らって「いいえ、甘いです」などと言うものは大罰当たり、サタンの手先で

す。地獄行き決定です。

今ならまだ間に合います。7の7度お許しになる、寛容な天のお父様が、あなたの悔い改めを待っておられます。さあ、素直になって悔い改めてください。これ以上神様を悲しませてはなりません。砂糖は辛いでしょう、辛いでしょう、ほれほれ、段々そんな気がしてきたでしょう。さあ、神様の胸に飛び込んで、思いっきり「砂糖は辛いです」と叫んでください。

そうですね、言えましたね。ハレルヤ、アーメン。インマニエル、アーメン。これであなたも私たちの仲間です。天のお父様とご一緒できます。無事天国に行けます。再臨の際には一緒に連れて行ってもらえます。良かったですね。聖書信仰に入れましたね。でも油断しないように。この世のサタンはしつこくて頑強です。脇目を振ってはいけません。

……さあ、あなたもこの世界同時革命実現の末端細胞の一つとして正式にオルグされました。先ず街に出て行って街宣活動をしてください。異端の青虫やウジ虫＝革マルたちに怒りの鉄槌を下すのです。その後は「よど」号を乗っ取って北朝鮮に亡命しましょう。あっちには同志が既に基地を作って待っています。

偽の旅券で出獄してシリアに行き、そこで大天使ミカエル重信房子の指示を待ちなさい。イスラエルの空港で機関銃をぶっ放すのです。そして浅間山荘のように、転んだ奴らすべてを総括してください。成功を祈る、同志よ。なお、このテープは自動的に消滅する。プシュー。

## 16、さらば工学部

最近、日本の若者の理科系離れがあちこちで問題になっている。特に製造業の人気凋落は著しく、人材確保が問題になるほどだ。たしかに若者の間で工学部離れは著しく、「さらば工学部」が合言葉になっているほどだ。そしてたしかに企業経営者たちもしばしばこのことを嘆くが、でもだからと言って工学部出身者の待遇を改善しようと言う動きは全く見えない。まことにずるいというか、それ以上に工学部は馬鹿にされているのだ。

理系は勉強が大変でかつ期間も長い。今や大学院は当たり前、だったらその分医学部に行った方がよっぽど儲かるし尊敬もされる。日本で一番偉い工学者である吉川弘之前産総研理事長（元東大総長）ですら、「工学部について魅力ある姿を描くことが

できなかった」と告白していることだ。工学部は今や、一時代前の百姓のようなものである。体の良い油虫だ。

「物作りがなくなったらなにも生産されない」、これはその通りである。政治家と商社とトレーダーしか居ない国には本質的に富の生産がない。でもこれは一時代前に「農家が居ないと食い物が無い」と言われたのと同じことだ。

つまり、ここが極めて大切なポイントなのだが、必要であることと、それを担うことがやりがいのあることとは全く別物なのだ。かつての農家だって、できの悪い長男が耕運機を買ってもらって、いやいや跡を継いだのではなかったか。

そもそも日本において生産よりもゲームやアニメなどの娯楽産業が花形となり、外貨獲得の先頭を切っているという事実は、日本もやっと成熟して真に一流国の仲間入りをしたということであって、むしろめでたい、歓迎すべき現象なのである。ではそういう国での物作りは誰がやるのか。それは、落ちこぼれか、貧乏くじ引きか、あるいはよっぽど酔狂な人たちである。この意味でも工学・モノ作りはかつての農業と同じだ。

いまや高校生の尻を叩くのに先生たちが、「君たち、一生懸命勉強しないと、工学部しか進学先がなくて、一生田舎で冷飯食いになるのだよ」と平然とのたまっている。若い諸君、特に政府の「理系をやろう」などと言うあおりにだまされてはいけない。現に昭和初期に「満州は日本の生命線である」などと乗せられて満州に渡った人たちは結局、シベリアに抑留されて、ひどい目にあっただけではないか。

## 17、科学教と科学相対論

かつてフィリピン等東南アジアから沢山の若い女性が、主としてキャバレーなどに出稼ぎに来ていたころ、その手の女性がたくさん住んでいたある地方都市で、その手の女の子がたくさん来て性病がうつる危険があるという噂が立って、市営プールががら空きになったことがあった。

がら空きでも市は企業ではないから困らないのだが、そこはそれ、サービスの低下を糾弾されるとまずいので、「毎日規定の消毒剤を入れて水質検査もしています。安全ですから来てください」と呼びかけたし実際に処置していたのだが、地元の日本人は依然として全然来なかった。

地元民は市の広報が嘘をついていると思ったのではない。さすがに他人の生死に

と無感動な役所でも、そこまでのウソはつくまい。地元民は「科学的に安全が証明されている」という証明の仕方を、心の底から信用していなかったのだ。確かにプールは安全かもしれないが、でも安心ではない。

人々はいよいよ自分の生き死になると、科学と言う他人行儀できれいごとの確定論理よりも、噂とか自分の生まれながらの勘とかの蓋然論理を優先して信じている好例だ。

いや平凡な一般市民に限らない。世界の最高学府であるハーバード大学の学生も、「先生にはホモが多くてエイズに感染している可能性が高いから」と言って、大学付属のプールには入らないのだ。そもそも生まれつき理屈優先の毛唐の、その中でも選ばれてことさらに科学という確定論理を専攻している若者たちでさえ、こと自分の生き死になると、科学を捨てて噂や勘を優先するのだ。

これは、たとえ科学といえども、人類と言う生身の人間には水戸黄門のご印籠の如くに決して絶対ではなく、むしろ「科学信仰」とでも呼ぶべき、数ある信仰の一つにすぎない、極めて相対的なものであることを示している。

それはそうだろう。科学だって一定の決まった手続きを踏んでなされるのだから、手続きのひとつである以上他の手続きより優先される理由は何もない。そしてベストアンドブライテストすらも根っここのところでは科学教よりもアニミズム信仰なのだ。際どいところでは科学教と言う一神教の神を捨て去るのだ。不信仰になるのだ。正体見たよ、ハハハハハ。

私はこのような態度がけしからんとは思っていない。むしろほほえましくすら思う。犬だって生き抜くためには勘によって毒を避けるではないか。だったらなおのこと、人が勘に従って生きてどこが悪い。むしろ極めて自然だよ。

ただ彼ら「科学者」「合理主義者」には、自分のこういう行為を良く内省して、むやみに科学技術や民主主義を振り回して他人に、特に我々東洋人に押し付けるのを辞めてくれさえすれば良いのだ。

## 18、蓋然論理と理論

蓋然論理に理論はあるのかないのか、あるいは「あるべき」なのか「ないべき」なのか、どっちでしょうか。蓋然論理が絶対ではない以上理屈がなくてもよい気がしますし、か



といって当たる場面では鋭く当たる面からは背後に何らかの理屈がありそうにも思えます。

確定論理の場合、その内の演繹論理はその論理自体が即理論あるいは理屈です。帰納法でもしばしば「コロンブスの卵」、つまり気づいてみれば「そういう理屈が背後にあったのか」と言う場合は多いです。こういう場合、帰納論理は単に理屈に気付くための梯子、きっかけとして働いたにすぎません。

では蓋然論理の場合です。例で見て行きましょう。「北海道は海産物の宝庫で、特に魚類は脂が乗っている」、これは絶対に成立するわけではなく、むしろ「一般的傾向」とでも言うべきものですから蓋然論理ですが、古代人はともかく現代人ならこれが、寒流の方はプランクトンが断然に多いため及び、魚が寒さから身を守るために断熱性の高い油を装備しているためと、「科学的」な理屈がつきます。

もう少し分かりにくい例で、「寺社の近くには公園が多い」、この蓋然法則に気付いた人は多いでしょうか。私の自宅の近くでも、弘明寺駅北側の公園、川崎稲毛神社の脇の公園、さらには上野公園（寛永寺）などがありますが、これは明治以降に広大な寺社領が政府の土地政策によって公共化されたためです。

この例は社会科学ではありますが、それでも理屈があります。もし理屈を先に知っていたら、個々の事例にいちいち感動するとか、それらから蓋然的な理屈を「再発見」している者は愚か者に見えるでしょうか？

もっと分かりにくい例を挙げましょう。冬には赤い実をつける植物が多いです。千両、万両、百両、ピラカンサ、ナナカマド、南天、アオキ等です。なぜでしょう。これは単に「多い」だけですから絶対論理ではありえない、明白に蓋然論理です。私は寡聞にして、この理屈を聞いたことがありませんが、偶然にしては際立ちすぎのような気がします。

では極め付きにさらに分かりにくい例を挙げます。「ソ連の書記長の頭はハゲとフサの交互だ」これは実際にそうだったのですけれど、どう見ても偶然ですね。およそ理屈などありません。

まあ以上の数例から、蓋然論理に理屈は付随していても良いが、絶対ではないことが結論できそうです。

## 19、偽善者とのやりとり

もう何年か前に、電車に乗っていたら、私の前に、如何にも「子羊でござい」と言わんばかりの、偽善を絵にかいたような若い男女二人が、神や教会を賛美する会話を聞えよがしにしゃべっていた。私にはもちろん耳触りで迷惑千万だったが。

と、その2人が、座っている私の方を見ながら、「この人は私たちの教会の隣人愛綱領の第3条に違反していますよね」などと言い始めた。どうせ下らないに決まっているから無視していたら、男の方が唐突に私に、「教会綱領に照らしてあなたに宣言します。こちらのおじいさんに席を譲りなさい」などと命令を下した。

ふと見ると、言われるまで気づかなかったが、たしかに高齢のおじいさんが立っていた。で、私はクリスチャンの生態をいやと言うほど知っていたので、その二人に「うるさいな、ふん、いやだね」と毒づいてそっぽを向いた。するとその二人は私の剣幕に後ずさりしながらも、「まあ！」などと言ってただ呆れている。

そして一問置いた後、私はそのおじいさんに席を譲った。するとまたその教会野郎が、「それで良い、ハレルヤ」などと言うものだから私もついにぶっちぎれて、「黙れ、このイカのキン〇マ、目障りなのだよ」と大声で叫んで立ち去った。教会野郎たちはただ眼を丸くしていただけだった。

さて、ここで私が使った蓋然論理(ほとんど確定論理だが)は以下の如し：

- ①クリスチャンは二重人格で上辺のきれいごとのみである。
- ②クリスチャンは書き物がないと何も言えない。
- ③クリスチャンは自己中心の正義や都合のみである。
- ④クリスチャンは実は弱虫でちょっとすごむとすぐに引っ込む。
- ⑤クリスチャンは幼稚園児以下なほどに応用動作がない。
- ⑥クリスチャンはチンケなプライドを持っているので無視が一番有効だ。

## 20、ゲーデルと手術

ゲーデルの不完全性定理という論理学の定理がある。哲学にまで深刻な影響を及ぼした、画期的な定理である。その内容は、「ある論理体系が完全であれば、その体系内で真か偽かを決定できない論理文が必ず存在する」と言うものである。が、こう聞いてもなかなかピンと来ないだろう。

もっと簡単に「システム内に収まらない場合」と言うのは我々も日常よく体験する。例えばインターネットが不通になったときにその原因と修復を行うのに、当然のことながらインターネットを介してすることはできず、そのシステム外の手段、例えば電話による問い合わせで行うことになる。

あるいは手術中に何か不都合があつて意思を伝えたくても、麻酔で口や手が動かなくなっていれば、何か別の手段、体を不自然に動かすとか、うおおと吠えるとか、何か通常ならざる、そのシステム外の手段を考え出して行わなければならない。

もしゲーデルの定理が、こういう日常の経験と同様のことを主張しているのなら、その内容はずいぶんと理解しやすいものになる……。だが残念なことにこのアナロジーは使えない。なぜかと言うと、ゲーデルの定理は「真偽の判定が不可能」と言っているのであって、「伝達（存在）が不可能」だとは言っていないからだ。「存在（表現）は可能だがその真偽を判定できない」と言っているのである。これらは微妙に異なっている。

では蓋然論理のように論理体系が「不完全な」場合はゲーデルの定理はどうなるのか。これについては目下考察中である。

## 29、バンクーバーハンバーガー

ちょうどバンクーバーオリンピックが終わったところで、新聞やテレビでは毎日バンクーバーのオンパレードでしたが、私にはなぜか、「バンクーバー」が「ハンバーガー」と読めてしまうのです。「ハンバーガーオリンピック」、H1グランプリみたいです。皆さんもこういう錯覚ありませんか。

良く知られたところでは「おこと教室」（お琴教室）が「おとこ教室」（男教室）に読めてしまうと言うのがあって、「わざわざひらがなで書いてあるのは錯覚で狙っているせいだ」とまで主張する妄想気味の女性までいるほどですが。

## 21、繰りこみ群も拒否する流れ場とは

流体力学はナビエ・ストークスの式によって記述される。つまり基本式が正確な場であるから、計算機を用いた数値流体力学も、単にこの式を離散化して数値解析すればよい、それは原則そうなのだが、これが文句なく通用するのは層流の場合に限るところ、実際に工業で出てくる流れはほとんどが乱流であり、乱流の本質は離散化すると抜け落ちてしまうので、乱流のモデル化が「研究」対象となる。

乱流モデルには、簡単だけれども不正確なものから、複雑だけれども計算時間が大幅に増えるものまで色々と提案がなされているが、現状の主流はLES（ラージエディシミュレーション）と言って、ミクロな乱流は個性がないからモデルで片づけて、大きな渦（乱流もミクロな渦の集まりである）のみ数値解析しようと言うやり方である。

で、ミクロな渦のモデル化だが、私が見て一番気が効いているのは、RNGモデル（繰りこみ群モデル）である。繰りこみと言うのはそもそも、ノーベル物理学賞受賞者の朝長振一郎先生が、量子電磁気学において、裸の電子の計測質量と理論から予言される電子の質量の差について、その差分だけ実在の電子にエネルギーとして「繰りこまれて」いるせいだと説明を与えたことに端を発した理論である。

つまり理論として、他の乱流モデルなどは比較にならないほど、このモデルは毛並みが良い。そして後に数学者たちが、繰りこみは「群」と言う数学構造を取ると定式化して、「繰りこみ群」と呼ばれることになった。ここで群と言うのは、対応する幾何学が存在すること、言わば相似関係があると言う意味だ。例えばフラクタルのように自己相似関係が存在することにより、群の数学構造が入る。

この繰りこみ群と言うのはその後偉大な理論として、物理学の多くの場面に顔を出して、理論の本質を構成してきた。その典型は相転移で、これに関しては繰りこみ群が実験結果を高精度で予言している。そしてRNGモデルはこの繰りこみ群を流れ場に応用したものである。

ところがこのRNGモデル、今一計測との合致が悪い。もっと幼稚な、初等関数を適当に組み合わせただけのようなモデルよりも劣ることがあるほどだ。これはどういうことであろうか。素粒子論から物性論まで目覚ましい成果を上げてきた繰りこみ群を、これらの分野に比べれば横綱と十両ほどに幼稚な分野である流体力学が拒否しているのだ。感情的に言えば流体力学は不遜である。

これは、落ち着いて言えば、乱流の乱れ構造は、自己相似が成り立たないほどに「癖や偏り」があるということだ。乱れとして規則性が無く、たちが悪いということだ。たかが古典力学のくせに。

と言う訳で、流体力学の研究者の質も低くて初等関数くらいしか分からない奴らが多いせいもあって、流れ場の世界では専らほとんど、初等関数モデルが幅を利かせている現状にある。馬鹿くさい限りではあるが。

## 22、蓋然論理とエントロピー

古典力学によると、宇宙はエントロピー（乱雑さの程度）が非可逆的に増加している空間であって、早晚「熱的死」に至ることが証明されている。ボルツマンの定理である。この定理は人生観から哲学に至るまで広い範囲に深刻な影響を与えた、確定論理の世界の画期的な定理である。この事象はもがいてもますます事態を悪化させるだけなのだ。内容的には確率論の変形と言える。

では蓋然論理の世界はどうであろうか。蓋然論理の連鎖は確率過程と異なり、連鎖を重ねても意味が発散するどころか智恵が凝縮されてますます意味が深まることは既に何例も見えてきた。つまり、蓋然論理は確率論と根っこから違うのであって、むしろ知恵でエントロピーを減少させる論理なのである。実際古典論でもエネルギーさえ適切に注入すればエントロピーは減少できる。このエネルギーが、蓋然論理では智恵の形を取るのだ。

例えば高度な芸術、絵画や小説は、確率論的な偶然ではおよそあり得ない形、つまり知恵と技と悟りで、人々を感動させる作品が多く残っている。人類は賢い限りにおいて、存在自体が明白なアンチエントロピーであると言える。ここが外的世界（確定論理）と内的世界（蓋然論理）の決定的な違いである。

人類よりもっと単純な植物を例にとろう。木々に能動的な知恵はないが、生き残った木々には蓋然的な能力が、遺伝子に刷り込まれているとしか思えないことがしばしばある。その一例として、木に養分が不足したときを考える。この時、木は全体としてしおれるのではなく、末端の葉っぱを選択的に区別して、1枚1枚枯らしていく（画像）。つまり明確な生き残りのための選別の生理が存在している。かように宇宙は実は他方で、アンチエントロピーの塊でもあるのだ。

2010. 05. 06 121

## 23、ヤマトタケルと蓋然論理

文学あるいは歴史書としての神話の論理における位置づけを、ヤマトタケルを例にして探ってみたいと思います。



ヤマトタケルは古事記、日本書紀に出てくる4世紀ごろの英雄ですが、悲劇の人物でもあります。熊襲、出雲、蝦夷と次々に平定したこの功績はその右に出るものがないほど鮮やかなのですが、そのきっかけはといえば、どうも父君の景行天皇に嫌われて遠ざけられた、穿って言えば「戦死して来い」と言われた感じなのです。

そして散々戦って勝利をもたらした挙句に、最後は都に帰れずに、疲れ果てて途上の息吹山で生涯を閉じてしまいます。その生きざまが返って判官鼻頂の日本人に好かれて、各地に伝説を残しています。

では神話に接するときその論理をどう見るべきでしょうか。タケルの伝承された業績を見ると、とても一人ではなしえないほどの偉大な業績を挙げています。この観点からは神話は作り話である、せいぜい「ヤマト朝廷の日本統一の過程を架空の人物に仮託して擬人的に表現しただけだ」との解釈も可能なわけです。これも一つの立場です。確定論理的立場とでも言いましょうか。

しかしながら記紀の記述を読みますと、タケルの足跡が実に生き生きと描かれている。無機質な歴史の叙述にすぎないならばここまで記述がリアルになるとは、およそ思えないのです。そこでもっと蓋然論理的な立場、つまりモデルとなった実在の勇者が居たと考える方がよっぽど自然ですし、話としても智慧と変化と美・武勇を感じて生き生きしてくるわけです。

つまり神話に対する態度として、客観的な合理精神もある程度必須ですが、合理化しすぎるとしばしばその一番美しいところを潰して、味も素っ気もなくしてしまいます。その意味で神話の解釈には、合理性と蓋然性という対立するものの両立、言わば一番盛り上がる形での住み分けと協働・止揚・融合の精神が必要になってくるわけです。

このような状況は例えば考古学のような、少ないヒントから全体像を探るような学問分野でも同様です。明日はもっと具体的な例で見えます。

では具体例で見ましょう。先日駿河の薩埵(さった)峠とそれに前後する旧東海道3宿を歩いたのですが、その旧東海道約10キロだけでも、道沿いのあちこちの神社に、ヤマトタケルの伝説が残されていました。

日本全国を回ればそれこそあちこちに山ほどの、かつしばしば互いに矛盾する、ヤマトタケルの伝説、伝承が山と残っていることでしょう。実際私が知っているだけでも、秩

父にも甲斐にも信濃にも上野（こうずけ）にも、あちこちにヤマトタケルの伝説が伝わっています。

しかしながら記紀には、ヤマトタケルが駿河の焼津で地元の豪族のだまし打ちに遭ったこと、そののち足柄を越えて相模の走水（はしりみず）に入ったこと、そののち甲斐、信濃、上野等を回って帰京の途に就いたことが簡潔に述べられているだけです。

ここで神話から真実らしいところを抽出する操作を「内挿」と呼ぶならば、内挿行為は話の確定論理化に当たるので、学問的にはより正しいのですが、欠点としてどうしても情報量を減らし、しかもしばしば一番盛り上がるところに水をかけます。

ところがここで喜ばしいことに、人の知恵とはそのような無味乾燥なものではありません。人は神話を骨に、新たな言い伝えを付け加えることが出来るし、実際しているわけですから。こういう行為を「外挿」と呼びましょう。

外挿の具体的内容は当然ながら相互に矛盾していたりしますが、外挿とは積極的な蓋然論理化の作用であり、蓋然論理にとって矛盾は致命的ではなく、むしろ付加された新たな挿話、知恵の方に興奮を覚えるのです。

そうしてきますとタケルの足跡の記述はますます痛快で、むしろ地味な天皇よりもよっぽど生き生きとしているほどです。結論として、神話に対しては徹底的な確定論理的見方も、逆に徹底的に蓋然論理的な見方も可能です。大切なことは、自らの見方を、どちらの論理にどれだけ依拠したか、明示して表現すればよいのです。

## 24、別の宇宙のリー群

我々の宇宙は4つの力、すなわち電磁力、弱い力、強い力、重力で構成されており、このうち前者3つは  $SU(3)$  のリー群で統一され、他方重力は  $GL(3,1)$  型のリー群で記述されるものの、これら全部を統一できるリー群は今のところ見つかっていません。これは現代物理学の標準理論です。

ここでリー群が出てくるのは、「第2種ゲージ普遍性」という物理の基本的要請に依ります。そして先日の記事で、ここからは多分に私の予想ですが、 $C$ 数も $Q$ 数をも超える、言わば蓋然数（波動数）である「 $W$ 数」に期待したいことを記述しました。

一方やはり先日の記事で、我々の宇宙は4次元時空間であるが、すべての宇宙が4

次元時空である必然性は全くなく、むしろ非次元や非距離な空間すらあって良いことを予想しました。そして時間も「直線1次元」には限らないことも考察しました。

加えてその記事の最後で、ありうるすべての宇宙形態を統一的に理解・分類・予言できる宇宙論、素粒子論こそが本当の根本・究極理論ではないかと提起しました。

であるならば次にすべき議論は、具体的に4次元時空以外の宇宙の力にはどういうものがある、それらはどのような数（C数、Q数、W数・・・）を係数とする、どう言ったリー群によって統一されるのかという問題になります。言い換えれば、この時点まで問うてはじめて、これまで私がこのブログで予言してきた素粒子論と宇宙論が「統一」されるに至るわけです。

例えば非次元（非線形）宇宙のリー群を例に取ってみましょう。ここで宇宙から線形空間であると言う要請を外してあるのですから、これを支配するリー群だって線形空間に限定する必要はないことになります。

もちろん、非線形な空間で解析学（微積分）はどうなるかという問題は発生しますが、これさえ適切に克服すればこれは、現在かなり限定されているリー群の種類はかなり豊富になると予想できます。これに係数としてさらにW数や非線形に特徴な新たな数を係数として加えれば、リー群は相当に豊かになるでしょう。

この観点から素粒子論と宇宙論を再整理すれば、数学にとっても物理にとっても相当に面白い理論体系が出現するのではないのでしょうか。そう予測し、かつ期待しているところです。

ちなみにこういう宇宙では物理が我々の物と根本的に違うのですから、仮に「生物」が居たとしても、我々の宇宙のものとはかけ離れていることでしょう。サスペンスライターとかが如何にキテレツでグロテスクな怪獣を造っても、結局は「頭1個で手足がそれぞれ2本」と言う「常識」から抜け出られないのと大違いです。

## 25、最小不幸と最大幸福

政治の目的は不幸を最小にすることであろうか、それとも幸福を最大にすることであろうか。これらは似ているようで大きく違う。これらが同じだと思える人は、「世の中は幸福と不幸の2通りしかない」と思いこんでいる、現代のデジタル教育に犯された人々

だ。最小不幸を目標とすれば、幸福の分布にはことさらにこだわらない。そして最大幸福を目標とすれば不幸のありようには無頓着になるのだ。

管首相は「最小不幸」を自らの政治目標に掲げた。一方小泉元首相なら「最大幸福が」自分の目標だ」と言うだろう。これら対称的な2人の例からも違いが分かる。そして「最小不幸」は民主党の理念に近くかつデマンドプル経済と親和性が高く、「最大幸福」は、自由党の理念に近くサプライブッシュ経済と親和性が高い。

もちろんこれらはどちらかを選ぶ二者選択の問題でなく、いずれもある意味極端なイデオロギーであって、これらを局面に応じてうまく使い分ける術が政治家の資質、智慧の有無になるのだが。

サイバネテックスあるいはゲーム理論に「ミニマックス理論」というのがある。皮肉にも鳩山前首相の得意の分野だ。2人ゲームと言う単純モデルを考えた時に、戦略は大きく2つあって、1つはミニマックス、つまり自分側の考えられる最悪のケースのうち最も悪くないものを選んでいくと言う戦術、もうひとつはマックスミニと言って、相手方の考えられる最大利益のうち最も小さいケースのものを選んでいく戦術だ。

そしてこの箱庭のような世界でも、ミニマックスとマックスミニでは一般に結果が異なることが知られている。ただし両者の結果が同じになる場合もある、それは競技がゼロサムの場合だ。ナッシュ均衡が成立するためである。つまりこのモデルから得られる教訓として、世の中がゼロサムからかけ離れているほど、管首相の政治と小泉前首相の政治の結果は大きく異なることになる。

なお、似たような選択に、政治は「最小悪」を採るか「最大善」を採るかという問題もある。政治は理想でも理論でもないから、いきなり完璧に良くなるわけがない。悪が少しでも少ない手段、あるいは善が少しでも多い手段を採っていくしかないのだ。

さて、ミニマックスとマックスミニ、日本にはどっちの戦術がふさわしく、かつ根付くであろうか。今度の選挙はこの問題を問うている選挙でもあるのだ。

## 26、年老いたペテロ

新約聖書の福音書に次のようなくだりがある(ヨハネの福音書21:15-25):「ペテロ、あなたは若い時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所に歩けますが、年をとる

と、ほかの人があなたに帯をさせてあなたの行きたくない所に連れて行きます。」これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現わすかを示しているのであった。

私が気になるのは最後の行の聖典編集者の主観による解説の部分だ。それ以前の2行(かぎかっこの中)はごく自然で、先入観なく自然に読めば、「若い時は体が丈夫だから何でもできるけれど、年をとると体が言うことを聞かなくなって、ついには他人の介護を受けるようになるのだ」と言う人の一生の自然な成り行きを語っている。

これは普遍的な真実であるとともに高度な悟りだ。かつて高名な禅師は言った、「年をとるときは年をとるのが良からう」と。ところが聖典編集者はこの当たり前故に高度な悟りである部分を、「ペテロが神の栄光を現す現し方に関する預言である」と、ことさらに合目的的な、意図的かつイデオロギー的解釈を付け加えている。

聖書の福音書を虚心坦懐に読めばわかることだが、イエスさんはこういう共産主義顔負けの安っぽい教訓主義など一つも言ってもやっても居ない。だからこの解釈は、聖典編集者が特定の意図をもって、つまり信徒を都合の良い方向にまとめ上げ、縛り上げるためにことさらに挿入した、不自然極まりない「訓示」なのだ。

福音書より後に来る一連の書簡集が、イエスさんとは縁もゆかりもない、凡人パウロの低能で下らない作り話であることは、ちょっと読めばわかることだが、新約聖書の中核をなし、かつ開祖イエスの言行録でもあるとされている福音書に、既にこのような「異端」が紛れ込んでいることに、真剣にイエスの悟りを知ろうと求める者は注意しなければならない。

「原始福音に戻れ」とは良く聞くスローガンであるが、私はあえて言う、「原子福音に戻った」だけでは足りない。用心深く、「原始のイエス」に帰りなさい。

## 27、リッチフローは栄えるか

今までに理学や工学をかじってきて、微分幾何学と位相幾何学の間にも当たるツールがあると便利なのにと考えたことがしばしばありました。微分幾何学は数値解析の精度向上には便利なのですが、数値が多すぎて理論考察や本質探査には猥雑過ぎます。他方位相幾何学は、本質はつかみやすいのですが、特に工学では、そこまで「きれいな」本質などそうそうなく、結局は使いにくいのです。

それに現状位相幾何は、幾何とは言いながらホモロジー群等を用いて代数的に解く



場合がほとんどで、義務教育の幾何のように補助線を引いて幾何的に解くものではないので、勢い「すり抜け落ちる」幾何的本質があまりにも多く、かつ議論や定理が実用にならないほど高次元に行きがちです。複素多様体が多いことも、このツールを現実から遠ざけています（ケーラー多様体等）。

そこで私が今、「ひょっとして使えないか」とひそかに期待し始めたのが「リッチフロー」です。リッチフローはペレリマンがトポロジー（位相数学）の難問である「ポアンカレの補題」を解くのに用いた、微分幾何学のツールです。

上記のブログ記事でも解説しましたが、リッチフローはリッチ曲率の変化のトレースです。リッチ曲率はテンソルですから、リッチフローは一番位相幾何に近い、「集約された」微分幾何ツールと見る事が出来ます。この観点からは、リッチフローが微分幾何と位相幾何（トポロジー）の間にあると言えます。もしかしたら微分幾何と位相幾何の大きな「溝」を埋めてくれるかもしれません。

問うべきポイントは2つあります。第1に「リッチフローは使いやすいか」、第2に「リッチフローは幾何的性質をどれだけ鮮やかに代表してくれるか」です。

まず、リッチフローはそのままでは群にはならないでしょう。もしなるならば独立の「第3の幾何学」として、とっくに見出されているはずですが、でも、むりして群にする必要もないと思います。群と言う概念は純粋数学には便利なツールなのですが、工学的応用には現実離れしています。

ここはリッチフローが群の手前、例えば閉多様体に沿ったリッチフローには「閉」に対応する何らかの指標が立つとか、大きく曲がっているところではそれなりのフロー形態になるとか、普遍量や幾何学的対称性（球面に近いとか正四面体に近いとか）にはそれを知らせるフローが対応するとか、そういったものがあってくれば十分なのです。

こういった特徴は応用工学のみに価値があるわけではありません。こういった方向で道が開ければ、幾何を幾何として扱う数学が発達するでしょうし、その結果幾何学的知識は現行の代数に落とし込むやり方の「おおざっぱな」ものよりもぐっと具体性が出てきます。さまざまなアプローチに道を開くでしょう。

果たしてリッチフローは理工学の救世主となりうるでしょうか。この方面からの研究、つまりリッチフローの一般性の研究が多方面から望まれる所以です。

## 28、統一原理と蓋然理論

数学や物理学では特に顕著であるが、科学技術の基本精神、究極の目標は、物事全部を包括して貫く「統一原理」を見出すことである。理論が統一的であればある程、その理論は高貴であるとされる。これは科学技術が実はキリスト教、特にプロテスタント神学の焼き直しであって、かつキリスト教は一神教であることと、深く関係している。

ではこれと対極にあって、八百万の神やアニミズムを論理化した蓋然論理では、やはり対極に、てんでばらばらの「理論」が歓迎されるのであろうか。例えば道を歩いていて、「あ、石ころがあった、あ、こっちには猫が寝ていた」などという意味のない事実の羅列が歓迎されるのであろうか。

これは違う。蓋然論理にとって一番肝要なのは、何度も繰り返すようであるが、知恵とか美の存在である。だから知恵も美も無い単なる無意味な事実の羅列・報告は意義がない。もちろん確定論理のように、向きになってことさらに現状から「意味を切りだす」ような、野蛮な行為はしないが、蓋然論理の定理なるもの、一様にそこはかと香り立つものがある。

例えば小堀遠州作の庭、単なる石と草の集まりとは異なる。竜安寺の庭園、さすがは世界遺産である。鎌倉大仏、単に大きいだけではない。用いている銅の目方では勝負していない。廃屋ブームや廃線ブーム、これらにしたってブーマーたちはそこに歴史の重み、人工物に自然が加えた微妙な混ざり具合にものの哀れ、つまり美を感じ取っているのであり、極めれば道、つまり定理となるのだ。

2010. 09. 03 100

## 29、伝東京大学跡

最近ウォーキングが趣味になったので、鎌倉や旧東海道をはじめ、名所旧跡を回ることが多いのですが、そこで気付いたことの 하나가、かつて大伽藍を誇った寺院の没落したケースが極めて多いことです。極楽寺然り、補陀落寺然り、増上寺然り、寛永寺然り、東海禅寺然り、川越喜多院然り、早雲寺然り等々です。枚挙にいとまがありません。

中世から近世にかけてこれら寺院は壇林、言わば高等教育機関、最高学府でありました。多くの英才たちが集い、また世俗的には出世の登竜門でもあったわけです。このようなところが今はほんの狭い敷地にかろうじて本堂一つを残すのみ、坊さんも管理人程度の人が一人詰めているだけ、中には廃寺になってしまったものも多いです。

世の中の栄枯盛衰かくの如し、永遠に栄えるものなし。賢人は歴史から学ぶと言いますが、凡人の私がこの歴史から何を学ぶかと言いますと、今は多くの建物や機材を誇り、若者が身を削って何とか入ろうとし、また権威のシンボルである大学、これも今から数百年後には狭い敷地にガードマンが一人詰めて拝観料の数百円も払って見て歩く、「大学跡」になっているかもしれないということです。

（上の画像は）今から数百年後の、「伝東京大学跡」です。もはや狭い土地に赤門と標本と警備室程度しか残っていません。ガードマンにお願いするとご朱印を書いてもらえます。単なる寂れた観光名所です。

ではその頃に何が「流行って」いるのでしょうか。私は学問のような左脳が支配するデジタル的知識ではなく、右脳が支配するようなアナログ的感性、例えば芸術とかテレパシーとか天才とか、そういうものを鍛え育てる場が大きく伸びていると推測しています。

### 30、アナログ波を一点に潰すと

広がりのあるアナログ波を、「デジタル数学の方が、少なくとも現状は厳密で多様なテクが適応できる」という便宜で、現代数学・現代教育・現代哲学はデジタルに「置き換えて」諸説明をしているわけです。

たしかにその方が現状は便宜なのでしょうが、便宜や万能と、正確や本質は全く違います。例を挙げましょう。メビウスの帯という幾何学的実体があります。紙テープを輪にするときにそのまま端と端を重ねないで、1回ひねって重ねて作ります（上の画像）。その結果テープに裏表がなくなり、縁は1本になります。

この縁が1本を利用して、例えば球面があるとして、この上に小さな穴をあけて小さなふたの部分を取り去り、その代わりに上記のメビウスの帯を貼り付けます。どちらも縁は「円周1個」ですから、トポロジー（位相幾何）の世界ではこれは可能です。さらにメビウスの帯の部分は縁に対して閉じていますから、出来上がった新しい「へそ付きの

球」は再び閉じた空間になります。これはサージェリーと言う技術で、トポロジーの世界では昔からよくつかわれてきました。

さて、ここで元の球とサージェリー後の新しい「球」ですが、ベッチ数と言うトポロジー不変量が異なるので、これらは異なる幾何学的実体と言うことになります。つまり後者の方は「ねじれ」が入った球面な訳です。ここでこのねじれ球面のねじれの部分の広がりをも1点に押しつぶしたとしましょう。そうすると普通の球に戻ってしまいます。つまりアナログのデジタルへの強引な押しつぶしは、対象とする幾何の性質を変えてしまい、仮に押しつぶし前の幾何が無矛盾だとしたら、押しつぶし後の幾何は仮にその方が素直な幾何に見えたとしても実は矛盾（パラドックス）を抱えているのです。

現代数学には解決されていないいくつかのパラドックスが存在しています。ラッセルのパラドックス然り、クレタ人のパラドックス然り、未解決ですが連続体仮説然りです。これらパラドックスは、実は本来アナログである連続体を、強引にデジタルな点の無限個の集まりに置き換えてしまったために発生したパラドックスなのかもしれません。

### 31、三島由紀夫金閣寺異聞

三島由紀夫の美学あるいは人生哲学は、一言で言えば「滅びの美学」です。桜は散り際が一番美しい。見事散るか、未練たらたら生き延びるか、この問いに断固として前者を選ぶわけですから。そしてこの観念、あるいは妄想と言っても良いかもしれない、に取りつかれるあまり主客転倒して、「滅びなければ美しくない」へと「進化」して行きました。

彼の代表作である「金閣寺」において、僧が金閣寺に火をつけたのを三島は、「僧が金閣寺をこよなく愛していたが故」と解釈しています。こよなく美しいものは美しく滅びなければ醜悪になってしまう。ならば「至高の愛人」である自分が美しく滅ぼしてあげようと言う訳です。この辺は予科練の歌の「見事散ります国のため」に通じるところがあります。

そして彼はこの美学を完成するために、割腹自殺を図りました。この美学は武士道に通じるところはあるものの、決定的に違うところがあります。武士道は生きるために死ぬのであって、無駄死にはしない。単に無駄死にしたいだけなら剣を持つ必要などない。ナザレのイエスのように、正当防衛の権利すら放棄して、ただ磔（はりつけ）になれば良いのです。

さて、私は金閣寺放火の心理について、少し違った解釈をしています。この僧は仏門の一人として諸行無常は当然に知っていた。形あるものは必ず崩れてなくなるわけであって、金閣寺とてその例外ではありえません。そして金閣寺が崩れる時、それは46億年後かもしれないし今夜かもしれない。いつ壊れるか分からないという恐怖、みなさんにはこの恐怖がお分かりでしょうか。

そしてこの僧も、いつ壊れるか分からない恐怖にさいなまれた結果、今自分で壊してしまえば、この恐怖から解放されることに気づき、そして実行したわけです。ボルツマンの定理から来る熱的死、どうせ来るなら自分でコントロールして来させてしまえば、もうそれより先を恐れることから解放されるという訳です。

もし三島の美学がこちらの解釈だったとしたら彼の最後はどうだったでしょう。自分がいつ劣化し墮落し壊滅するかもしれない恐怖、それから逃れるためならむしろ、自決の道を選んだでしょう。ただし演説や切腹や軍隊まがいの憂国の侍の真似と言うよりは、坂口安吾や太宰治のような私的なそして詩的な自死だったように思います。あるいは有島武雄と波多野晶子のような。

どちらが文学的か、あるいはどちらが日本を励ましているか、あるいはどちらの方が理解されやすいか、それは評価の分かれるところではありましょうが。

### 32、蓋然論理における大数の法則

蓋然論理は、再現性は保証されないがなぜか肝心なところで良く当たるような論理である。それにしても再現性が保証されていないのだから、科学の世界の外にいる。この世界を私は「準科学」と呼んでいる。

さて、私は最近趣味で家庭菜園をやっている。まだ初心者だ。野菜果物に、私は水をくるとか世話はするものの、これを育ててくれるのは太陽等自然の恵みである。9割以上自然のおかげで収穫が出来ているのに、多くの人々はそれをあたかも自分の成果のように喜んでいる。

警告したいが、ここで太陽さまへの感謝を忘れると人間的な一神教に転落するのだ。農業漁業等は実は自然の恵みが本質であって、それゆえにアナログ・蓋然論理と親和性の高い、また地球環境保護やエコと関係が深いところにある、一種の未来学だ。



さて、私は植物を育てていて、いろんな経験をする。ある時には思いのほかの収穫があり、またあるときにはなぜか苗が枯れてしまったりする。そのたびに私は「学習」をする。水は朝晩にくれたほうが良いとか、水をやり過ぎると根腐れするとか諸々だ。そして学習するたびに私は「賢く」なる。だがこの時の知見は一つとして、再現実験をしていない。家庭園芸にいちいちの再現実験などそもそも現実的でない。つまりここで得ている知恵はことごとく蓋然論理だ。私の体験はまさに蓋然論理の塊だ。

それにもかかわらず私は確実に進歩している。手ごたえがある。そして来年は、来年もきっと苗の2、3本も枯らすではあろうが、それにしても今年よりはもっと手際よく植物を育てるだろう自信がある。つまり、蓋然論理の塊は、これまたあくまでも蓋然的にということであるが、大抵の場合進歩をもたらすのだ。

これは菜園に限らず人たるものが何らかの試みを行う際に、ほぼ常に経験していることである。つまり、蓋然論理による知見の塊は、あくまでも蓋然的ではあっても常にではないが、進歩をもたらすという蓋然法則が広く成立すると結論できる。この確信・法則は蓋然論理の意義づけに置いて決定的である。私はこの確信を「蓋然論理の大数の法則」と名付けたい。

### 33、蓋然論理の演算と作用素

先日アナログ集合の数字を検討した。では進んで演算とはどのような姿であろうか。デジタル数字における演算とは基本的に加減乗除である。だが加減乗除は自然にその中に、全順序と無限を含蓄するものであって、アナログ数字にそのまま適用できるものではない。

アナログ数字の、「始まり」「ど真ん中」「かなり進んだ」「衰え始め」等々に対する演算とはすなわち、「始まり」を「ど真ん中」に進める行為、あるいは「衰え始め」を「かなり進んだ」に引き戻す行為である。こういう行為は演算と見るよりも作用素と見たほうが分かりやすい。

ただこの作用素、デジタル数字の作用素といささか異なる。つまり、同じ数字に同じ作用素を作用させても、同じ結果が出るとは限らないのだ。数字も作用素もアナログで幅があるうえに、その作用素の置かれた状況、例えば「時が満ちているか否か」によって結果が大きく異なるからだ。さらに作用されて落ち着いたあたりに、適切な「数字表現」が見つからないということもある。

作用素はさらに進んで、数字（元）と作用素の間の相互作用とも見ることができる。ここまで来ると、元と作用素の区別があいまいになり、むしろ「元は常に同時に作用素である」という世界が見えてくる。こういう世界の「元」を、私は従来から「エージェント」と呼んでいた。同じ虫が、食いもすれば食われもするのだ。そしてこのエージェントの様相は、まだあまり唱えられていないが、実は量子力学や素粒子論の究極的な姿だと、私は睨んでいる。

ここにも蓋然論理の「新波動性」と並んで、蓋然論理やアナログ集合が先端物理学のミッシングリンクをつなぐことが出来そうな可能性を見て取る事が出来る。

### 34、比較可能性と蓋然論理

「そんな板ばさみも何とか跳ね返せないようでは、面接合格はおよそ無理だな。」先日私が娘に何気なく放った言葉である。このような会話はだれもが日々日常平気で、ほとんど無意識に行っているものであって、ことさらに珍しくもなんともない。だが、こういう比較は確定論理とデジタル集合の観点からは、厳密にはあり得ないことだ。なぜなら、板挟みと面接合格は異なった概念であって、比較不能だからだ。

たとえば「例えば労力に置き換えれば、あるいは恩恵に置き換えれば、さらに金額に置き換えれば比較は可能ではないか」と言う反論があるだろう。だが、この反論は確定論理では成り立たない。なぜならば、尺をメートルに変換するのと異なって、板挟みを労力に置き換えるための変換係数は、仮にあるとしても、とても一意に定まらないからだ。そして確定論理ではかような変換係数はあり得ない。主観と経験に左右されるからだ。

そして主観と経験と言えばこれは完全に蓋然論理とアナログ集合の世界である。実はこちらの世界で労力や恩恵に置き換えて、人は比較できないものをあえて比較衡量して、日々の決断と選択の判断材料としているのだ。だから当然に当事者によって、個々の事情によって、また環境によって、大小関係は異なってくる。

たとえば「そんなに場あたりでケース依存であるとすれば、そもそも常識が違いすぎて、他人同士の会話は成り立たないのではないか」と反論されそうだが、そこは先日挙げた大数の法則があって、そうそう人に依らないある程度の相場観が学習によって形成されて存在するのだ。

こうやって応用広く、蓋然論理によって、人は日々の無数の選択をしている。時には誤るが、大抵はそう悪くない。現に投資で、普通の人が、ノーリスクローリターンと、ハイリスクハイリターン（元本保証なし、株のようなもの、馬券のようなもの）を平気で比較し選択して、リスクテイクしているではないか。

なお、この比較の過程で、比較されるべき事象を、比較に先立って先ず言葉に置き換えてはいけない。言葉への置き換えは一種のアナログ・デジタル写像で、微妙なところを離散的な点に縮退させてしまうからだ。これは情報量の大きな損失である。感じるままに比較して、その差も求められるまで言葉にせずを感じるままにしておいた方が、断然に鮮度が落ちない。

さらに、比較すると言う行為の重要性をもう一点挙げるならば、それは先日アップした作用素、つまり、「ある元に作用素が作用する前と作用した後を並べ論じる」ことにもなると言う点が挙げられる。比較すると言う行為は、アナログ集合の演算を考察するにあたっても極めて本質的であるわけだ。この点についてはもっと深い考察が要る。

### 35、ビジュアル記憶と蓋然論理

現在、脳の研究が盛んです。脳のメカニズムは科学の言わば最後の砦として、各方面から研究されています。そんな研究の一つの流れに、碁・将棋と言ったルールゲームの打ち手の、打つべき手の気づき方で典型的な脳の働きを調べようと言う動きがあって、もう始まっています。もっとも脳の働き方と言っても、頭の外に電磁計測端子を張って、微弱な生態電流を計測しようと言うたぐいのものですが。

さて、そんな碁・将棋脳科学のテーマと言うか素朴な疑問に、『「打ち手は碁盤の全体観で、一目で局面を読み取る」と言うが他方では「定石」という論理もある。碁盤の絵という直観思考と、定石に依る論理思考と、一体どうやって組み合っているのだろう』という疑問がある。ビジュアルと論理の二律背反の融通無碍な組み合わせ、これは我々も日常茶飯事でやっていることだが、たしかに水と油のようで、頭の中身を全く切り替えないと不可能な技のように思える。

この問いに対する私の答えはこうだ。研究者を始め人々はここでの論理を確定論理と見なしている。この見方ではアナログな全体観とデジタルな論理が組み合う訳がない。だが定石は経験によって導き出された蓋然論理、つまりアナログ論理なのだ。と

すれば、全体観も論理もどちらもアナログだから、うまく溶け合う余地も出てくる。いかがであろうか。

### 36、群論の非生産性

現代数学の一番と言ってよいほど重要な道具・概念に「群論」がある。ある点集合が群をなすとは、集合間に演算が定義されていて、細かいことを除けば、その演算の結果が再びその集合内に落ちることを言う。つまりアウトサイダーを作らない内向きの関係が成り立っているということだ。

現在数学の諸分野で群論が顔を出さない分野はないだろう。それほど群論は、数学であるかないかを仕分ける踏み石なのだ。その一方で以前私は指摘したが、群論、虚数、多体問題、この3つが数学をややこしくして問題をいたずらに増やし、あまたの数学者に永遠の飯の種を与えている。特に群論が数学をして世の中の現実から乖離させている。

「群論でなければ数学にあらず」、これは確定論理の世界ならあるいはそれでも良いかもしれない。だが蓋然論理の視点からはどうであろうか。蓋然論理のキーワードは智慧であった。あるいは健全な主観と言ってもよい。内輪の論理や演算に、果たして智慧は必要であろうか。むしろこれらは背反事象と言ってよい。論理や演算を内に限ろうとする働きは、すなわち智慧を抹殺する働きなのだ。

だから以上の議論から、蓋然論理の世界では群論の足かせが真っ先に外されて闇に葬られるべきであると言える。蓋然論理の世界に群論は必要ないし、邪魔ですらある。さようなら、エバリスト・ガロア。

### 37、自然に帰れ

悲惨な状況にある原子炉に外部電源が通じて、とりあえず事態は収束に向かい始めたようだ。それ自体は結構なことだが、その評価が「我々は多くの困難を、結局は勇気と英知で克服した。人類は偉大だ」と言うような総括に終わるとしたら、それはとてもない大間違いで、まさに天に向かってつばを吐くような行為だ。でも被ばく覚悟で放水したレスキュー隊員たちを「ヒーロー」呼ばわりする、毎度おなじみ欧米風のお涙ちょうだい論調が既に始まっている。

そもそも自然に逆らって、「我々人類は原子力をも支配できる権能を神より与えられている」などというノー天気な、そして実は限りなく傲慢なキリスト教の教えのなれの果てが今度の原発事故ではないか。きっかけは天災だったかもしれないが、その後の推移はまぎれもない人災だ。「安全です」などと称して原発を設置したのは人間だろう。

振り返ってみよう。もはや原発なしでは日本の電力は完全に供給できない。だからこそ今計画停電をしているのだが、この計画停電は「だから原発はどれだけ危なくとも必要だ」という議論に行くとしたらそれこそ間違いの上塗りであって、実は原発を導入したことによって広がった「樽のタガ」を、結局不要なぜいたくと人口増と言うようなものに浪費してしまっただけで今があると反省すべきなのだ。

この反省に立てば今回の原発事故の次に来るのは、東洋哲学の究極の目標である「自然との共存」に戻ると言う方向であるべきである。決して難しくない。日本人だってつい150年前まで実行してきたことだ。これが出来ないのはひとえに、先の「技術革新による桶のタガ広げ」で野放図に人口を増やしてしまったせいだ。

地球環境をいろいろ言っただけでそのための技術開発に熱心な今日この頃だが、技術でダメにした自然を再度技術で「元に戻す」など、ひん死の重体者にモルヒネを投与するようなものでダッチロールの後に暴発するのは目に見えている。それよりもエネルギー垂れ流しで増やした人口を減らせば環境問題などおのずと解決するのだ。この人口問題と言う根本なところの議論がなぜかタブーになっている。

今こそ自然に帰ろう、間に合ううちに。

### 38、だまされる方が悪い

大震災に起因する電力不足で、関東は今計画停電（輪番停電）が実施されている。ほとんどの地域で平均して1日3時間ほど、電力供給が途絶えるのだ。さて、ここでもわかに困ったのが、ここ数年流行りを見せていた「オール電化住宅」なる家を買った人たちだ。真っ暗な中冷暖房はもちろん、ガスがないので煮たきもガス暖房もできない。まさに陸の孤島、孤立無援だ。

このオール電化住宅なるもの、そうでない住宅より購入価格は割高である。設備一式の初期投資に金がかかるからだ。それにも売り出しは結構堅調だった。「オール電化」という響きが先進的かつ洗練された雰囲気を出しているためらしい。いわゆる都



会の鼻持ちならない小金持ちが「タクなんぞオール電化なのよ」などと格好を付けたくて、購入したらしい。

そして今やオール電化住宅の需要は原発2基分に匹敵するほどだと言う。そこにやってきた深刻な電力不足、鼻持ちならない鼻がへし折れた感じだ。今回の停電はまだ良い。季節は春先だし、4月中には終了する見込みだ。だがこの夏も供給不足と計画停電は不可避である。クーラーのない蒸し風呂の中で毎日3時間どうやってしのぐのだろう。

識者によると冷房をする、クーラーに入るのは、決してぜいたくでなくてむしろ健康を保つための必要行為であって、現に電力不足のなかった昨夏も、熱中症で150人以上が死亡していると言う。ざーます奥さんの死亡、正直同情しないしむしろ笑えてしまう。世の中にはややお高めだがガス冷房と言う装置もある。だがこの人々は使えない。ガスが根っこからないのだから。

供給源の多様化、この重要性など学生でも知っている。品ぞろえを多様化して販売先も多様化し倒産を防ぐ工夫は、それこそ町工場のオヤジだって日々心がけていることだ。こんな誰でも知っている基礎的なことも忘れて目先の格好良さと「売らんかな」のおだてに載せられたオール電化住宅購入者たち、これはもうだます方でなくだまされた方が悪いと言ってよい。自業自得の夏を迎えなさい。

### 39、やっぱりダメだったか：飛行船と原子力

「昔飛行船、今原子力」、一時は栄えても結局は隘路に入って廃棄される技術は結構多いです。その隘路への入り方で派手にダメになったのが、昔は飛行船、そして今は原子力と言う訳です。これらに共通点はあるのでしょうか。

どちらも人類の夢をかなえる新技術として華々しく登場しました。飛行船は人が鳥のように空を飛ぶ夢を、そして原子力は人類が半永久的なエネルギーを支配する手段として、あたかも人が神に近づいたかの錯覚を与えました。

しかし決定的な欠点がありました。実は制御が非常に難しいと言うことです。飛行船の場合は風船に詰めた水素が火に弱過ぎ、そして原子力の場合は暴走を止めるのが実は困難だと言うことです。これらの欠点は当初は過小評価されていましたが、事故を目の当たりにして人々は夢から覚めました。そして飛行船の場合2度と使われなくなりました。

飛行船の場合、飛行機と言う代替技術があり、飛行船が華やかな時は欠点ばかりが予測されて冷飯食いでしたが、飛行船がつぶれてからは改良に次ぐ改良で現在の「ジャンボ機」にまで至っています。基本的にダメだった2技術の共通点は、そもそも危険なものをだましながら使っていたと言う点です。

それに対し対抗馬だった飛行機、当初は「あんな塊が飛ぶものか」と思われていましたが、原理が単純な物の方が最終的には物になるようです。石油ストーブが原始的だけれども、オール電化などより一番頼りになるようなものです。

では原子力に代わる代替手段はあるのでしょうか。良く挙げられるのは風力、太陽光、そして核融合ですが、どれも今すぐと言えるものではありません。どうなるのでしょうか。

#### 40、自分までだますとこうなる

終息までまだまだ長い道のりの暴走原発、しかも大汚染に対し人海戦術、白兵戦しかない消耗戦。専門家によるとこんなことは想定していなかったと言う。目の前で繰り広げられる想定外の現実、安全神話という押し付け論理のあっけない崩壊、たった1日で1兆円以上の負債を抱えた電力会社、これらは一体どういう構造になっているのか。

安全神話によると、人が原発事故で死ぬ確率は隕石に当たって死ぬ確率より低いはずだった。たしかに今回の事故ではまだ誰も直接的には死んでいない。死人がいなければ安全神話はまだ崩壊していないと言うことか、そんなのんびりしたことを言っていて良いのか。暖かい部屋で鉛筆を嘗め嘗め安全神話を発明した人は、今こそ世間に向かって持論を高らかに唱えるべきだ。

でもここで百歩譲って、他人をだますのはまだ良いとしよう。今回の事故で終わる一連の原発導入過程で絶対に許せないのが、これら原発推進論者たちが、自分たちをも騙して、良心をあえて麻痺させて、言わば白昼堂々と唯我独尊に原発推進を進めてきたところだ。周りをけむりに巻くはずの安全神話の集団催眠に自らも罹ってしまった。カルトの恐ろしいところだ。

で、自分も騙した結果が、イケイケどんどんやってきて他人への大近所迷惑はもとより、自分まで気付いてみたら全部お釈迦、1日で負債1兆円超。これが愚の骨頂でなくて何だろう。

確率のウソと言えは昔米国で「確率裁判」と言うのがあった。「被疑者Aがある場所で被害者Bにある時に会ってかわりをもつ確率は隕石に当たる確率より小さい」と言う論理で被疑者を下手人に決定する手続きだ。ところが程なく、「市民Cが旧知の親友Dにある特定の場所と時間でばったり出会う確率も隕石に当たる確率より小さい」ことが示されて、確率裁判はすたれた。「確率論的安全神話」はこの事例に懲りていない。

「民主・自主・公開」の大ウソ。札束で頬をなでるやり口。さもないとあれだけ広大な発電所敷地がまとめて取得できるわけがないじゃないか。当事者の電力会社は1夜で、事実上倒産の日本航空を通り越して水俣病の「ちっそ」のような、お詫び行脚をして歩く単なる被害者救済弁済保証機関としてのみ存続が許されるしょうもない組織になり下がった。自分までだましたせいだ。

#### 41、科学技術信仰の崩壊

今回の福島第一原発の想定外事象、原発安全神話の崩壊、これは何を意味するのでしょうか。もちろん以前述べたように、安全工学の実態は儲けを優先した後付けの理屈です。だから「鉛筆嘗め嘗め」はあったのですが、それにしても個々の事象の発生確率を算出してその結果を積み上げて結論を出すという手続きは立派に科学的手続きです。

科学技術は実はキリスト教、特にプロテスタンティズムの焼き直しに過ぎなくて（ニュートン・パウロ主義）、従って、強烈に排他的で絶対主義に貫かれ、かつ異端審問や魔女狩りにうるさいのです。例えば占いのように異端の烙印を押された「似非科学」は地獄の火に焼かれる運命にあります。永遠に救いはありません。

しかしながら原発安全神話は始めから終りまで、踏み外すことなく正統的な科学的手続きを踏んで組み立てられています。個々の部品の安全確率は、破壊実験や現物に基づいた統計、あるいは小規模厳密実験の成果などによって一々地道に求められていて、恣意的な要素はありません。これ以上のものはないほど優れた科学の成果、金金字塔です。

他方現に目の前に広がる想定外事象の連続、これは見方によっては、科学技術ではやりたくても金がかかり過ぎて出来なかった、壮大な実規模実験と言えます。ですからこちらにも立派に科学的な結果です。でも科学は本質的に一神教ですから真実は1つのはずで、真実は1つでなければならぬところ、真実が2つあった、これは矛盾です。矛盾が出たと言うことは背理法に従って前提に間違いがあったと言うことです。

どこが間違いだったのでしょうか、それは「科学的手続きは無謬である」という信仰です。あたかも「神は一人」と仮定したら矛盾が出て、実は多神教だったようなものです。科学は無矛盾、科学は絶対、国民全員が小学校から教え込まれているので誰でもそう信じて止みませんが、今度の原発安全神話の崩壊は、実は科学技術絶対主義の崩壊をも意味しているのです。

#### 42、福一放水隊は英雄か

東京消防庁による決死の福島第一放水隊、これについては世界各地から「ヒーロー」「英雄」の掛け声がかかっている。「イヨッ、ヒーロー、フクシマ50」と言う訳だ。だが私はこの手のノリにどうも違和感を覚えてしまう。もちろん放水隊は偉い。それは否定しない。だが「英雄」「ヒーロー」、こう呼ばれるほど、あるいは単細胞なキリスト教徒の欧米人にも理解できるほど、彼らって安っぽいのかなと思ってしまう。

欧米人が英雄と言う時、これは「誰もできないことをした人たち」と言うことだ。さらに言えば「天の父なる神のみ心になつた行いをした」ということだ。いずれにしても特徴は、「行為によって評価されている」と言う点にある。

もちろん行いは大切だ。特に最近人気のサンデル教授の言うように「正義・平等・効率」の三点セットが重要な民族にとっては行いがすべてだろう。だが私は、行いよりもその裏付けとなる心構えとか徳の高さとか美しさとかの方がずっと尊いと思う。

放水隊が「偉い」と日本人が感じるのは、その行為によってではなくむしろその武士道の如き不動の使命感、無言の覚悟に依るのだ。行為はそれらの心構えに単に付随してきたに過ぎない。その彼らを「ヒーロー」よばわりするのはあたかも彼らをシーシェパードの船長と同等に置くような安っぽい失礼極まりない待遇だと思う。

中には「四十七士の再来」と言う声もあるようで、これは評価としては形式的には正しいのだが、我々日本人が四十七士に熱狂して歌舞伎の題材にまでなるのは、彼らが英雄だからではなく、彼らが醸し出す美意識に我々日本人が情動・琴線のレベルで

反応するからなのだ。欧米人には四十七士は単に「出来ないことをした人たち」にか見えていないだろうが。

とにかく日本人の美意識をイデオロギーで手前勝手に解釈するのは、誉め言葉も含めて辞めてほしい。別に欧米人、特にキリスト教徒に気に入られて奴らの布教の駒として体良くつかわれるためになんか、誰も何もやってはいない。

### 43、ユダヤ人のイエス観

以前イスラエル人の友人に、イエスキリストについてどう思うか聞いてみたことがある。ご存知のようにキリスト教のメシア（救世主）信仰はこれをそもそもユダヤ教から引き継いでいる。ただ、ユダヤ教がキリスト教と異なるのは、ナザレのイエスをメシアとは認めていないことだ。他方現行のキリスト教はイエスを、「我々の罪の身代わりに十字架に死んだ贖いの神」と位置付けている。

そしてこの質問に対するそのイスラエル人の答えはいとも単純明快だった。「イエス、あの男は神の子ではなくユダヤ人の子で、しかも正当防衛と言う人間生まれながらの固有に備わった基本的人権を行使するのを失念して死んだ、単に愚かな男だよ」と言うものだった。私はなるほどと思った。たしかにこちらの解釈の方がよりユダヤ人らしく、しかも理が通っている。

ところでイエス自身は自分の死について何も言っていない。彼の死を「贖罪の死」と位置付けたのは、現行のキリスト教の事実上の開祖である使徒パウロである。そしてパウロもユダヤ人だ。であるならばこの2人のユダヤ人のイエスに対する見解がどうしてかくも対極的に異なっているのだろう。ちなみに私はユダヤ教徒ではないので肩を持った発言はしていない。

「贖罪」という概念自身はユダヤ教の根幹をなしている。「神がイスラエルを贖われた」という文句は旧約聖書のあちこちに出てくる。だがこのアナロジーをいきなりイエスと言う犬死にした一個人に当てはめるのは相当の無理がある。その無理を可能にしたのは、パウロが当初キリスト者を迫害していたことへの反動である。反動の余りパウロは、ユダヤ人の基本動作を忘れたかのようだ。

こうして不自然な創作宗教にして元祖カルトたる「キリスト教」は始まった。そしてこの始まった時点で本物のイエスさんはどこかに吹っ飛んで見えなくなっており、むしろイ



エスさんの理念とは正反対のものが始まっている。もう羊頭狗肉を通り越して、盗人猛々しいとしか言いようがない。つまり、この「宗教」はもう「パウロ教」とか「パウロ主義」と呼ぶべきグロテスクなものだ。

新約聖書の記述に見える使徒パウロは、相当の偏屈者で極端な性格だ。日本史から似た人物を拾うならば、犬公方こと徳川綱吉あたりであろうか。極端を人に押し付けてやまない。滑稽を通り越してけしからんのだ。しかもその極端にまことしやかな理屈が付いている。

例えば神父の独身主義やパラノイアな程の男女の不貞の禁止、人の自然な喜びの感情すらも否定する極端な抑圧主義、これらはいずれもみなパウロの個人的な女嫌い人間嫌いの性格に起因している。禁欲主義と言う世界標準は、実は神ではなく、うんちもした人間パウロの個人的偏屈の、世界への押し付けの最たるものである。

私はこのように、神ではないどこかの馬の骨の一個人のくせが、世界標準と称されて世界を支配する傍若無人さに、しかもそれが、共産主義も加えれば世界人口の半分と言う、独占禁止法をもはるかに超えた世界単色化と言う、多様化安定と反対方向に進んで行くことに、人類の暗い未来と滅亡の予感を感じるのである。

#### 44、蓋然空間における相対論

以前申しましたように、蓋然空間は確定空間と異なり、離散・集合を繰り返す動的な空間です。物理的な我々の4次元時空のようにおとなしく固定されていない。そしてその離散・集合の動きは徹底していて、どちらかの枝が動いているかと言うことは決められずに、言いかえれば固定している原点など全くなき、とにかく近づいたり離れたたりしているわけです。

では、こういう空間に仮に相対論が作用しているとして、その作用の仕方はどんなふうでしょうか。ある物理的な点が、空間のどこかにこびりついていたとします。でも空間自体が動くのですから、その点は固定されているようであって、固定されていないようでもあります。

従来の空間における相対論は、もちろん光速普遍性が大元にありますが、どちらが動いていてどちらがとどまっていると言う区別があった。だからこそ、「光速近くで動いている物体の長さは長くなりかつ時間進行は緩慢になる」と言えた。しかし蓋然空間ではどちらが動いているかも相対的ですから、「ある点から見れば他方が伸びており、

その伸びている方から見ると実は先の視点のあった物体が伸びている」という状況になります。つまり相対性が徹底します。

じゃあどっちも伸びていてどっちも伸びていないとしたら、それらが行き会ったとき互いにどう見えるの、ということになりますが、注目すべきはここに観測と言う行為が入っているでしょう。おそらく量子論と類似に、観測行為によって縮退がほどけて、両者の関係が確定するのではないかと考えています。もし本当にこうであるならば、相対論の相対性がより徹底するうえに、量子論との統合にもきっかけが出来ます。

なお、因果律についても同様に、観測によって因と果が確定するのですが、そこはアナログ集合、「どちらが因でどちらが果とも言えない」という言わば楕円型の因果関係もありうることに注意して下さい。

#### 45、笑いに見る蓋然論理

ここでは蓋然論を広く見るための糧として、主観の典型たる「笑い」を取り上げ、その笑いと言う行為に何らかの構造が見いだせないか検討してみます。

お笑い1:

ある人がある時、「私は根に持つ性格だ」と言い、また間をおいて別の時には「私はいい加減な性格だ」と言った。いずれもそれぞれの時の、他人からの追及に対する言い訳として言いました。これらはそれぞれには「あ、そう」と言う程度だが、ここで「両者を組み合わせる」と言う気付きがあると、「根に持つ＝いつまでも覚えている」「いい加減＝すぐ忘れる」で矛盾があることに気づく。この気付きをストレートに返すのではなく、「根に持ってかっいいい加減とはろくな性格じゃないね」と捻って言い返せば、智恵に依り矛盾が笑いに転化する。

お笑い2:

「ラーメンを全部食べて汁まで飲んだら底に煮えたゴキブリが沈んでいました」、この状況は特に論理と言う訳ではないが、これだけで一つの情景を表している。ラーメンを食うと言う至福と、実はゴキブリの汁を飲んでいたのだと言う悲劇、この曇天返しが、聞く人をして激しい共感呼び起こします。で、この程度の暗転なら喜劇のうちですが、例えば「結婚式の最中に花嫁が心臓発作で死ぬ」とかになると、事件の構造は類似ですが、喜劇を通り越して悲劇になります。これは例えば、「かゆい」が強くなると「痛い」になるように、笑いと言涙の間は実は近いのかもしれないことを示唆しています。か

## 瞑想録（そのプレ2）

つ、笑いにも涙にも、何らかの「状況の矛盾」のようなものがからくりになっている場合が多いことも示唆しています。

お笑い3:

「車が赤ん坊を轢くとその運転手は鬼畜のように言われるが、轢かれたのが寝ていた酔っ払いのおっさんの場合は、はははバカなおっさんだとなる」、この例は、相互の状況は類似であっても主観は全く逆に働くことを端的に示している、一種の笑い話と言えます。

お笑い4:

「赤信号みんなで渡れば怖くない」、これは意表を突いた蓋然真理であるが、これをさらにもじって「赤信号みんなで渡ればみんな死ぬ」とした場合、これはもう1回意表を突いた真理になっている。そしてこれら2つの真理は、互いに矛盾する関係にありながらも両立している。特に後者が当たり前のようで実はブラックユーモアになっていて笑える点にも注目すべきである。

お笑い5:

「あいつは右目で泣きつつ左目で笑える奴だ」、人の顔の筋肉の構造上こういうことは本当にはできないのだが、従ってこの警句はロボットには分からない種類のものだが、それでもこの例えは、その対象となっている人の性格の二重性を、笑える形で端的に表している。つまりやんわりとした非難、あるいはからかいなのだ。

お笑い6:

「サラリーマンが『今日は会社に行きたくないなあ』と思うときはどんな時?」という問いに対して「暑い日」と答える。これは質問者あるいは聴衆が例えば「嫌な上司と会う時」と言ったような「複雑な」状況を期待していたところを逆に単純な答えを返すことにより、うっちゃりで笑いを取った例と言える。こういう笑いの取り方もあるのだ。

気付き1:

「原発と飛行船」という「2大失敗例」に共通の原因、先日これについて記事にしたが、実はこの共通点に気付くのに結構長い瞑想が要った。そして出た答えの「何らかの危険物を積極的に抱えていて、だましつつ運用していること」、これに至るプロセスは何のヒントや前例もない全くの突然のひらめきであった。なお、瞑想の過程で論理的思考もしていない。むしろ言わば、アニミズム的気付きだった。意識下では色々な思考回路が働いていたのかもしれないが。

気づき2:

「奥の山の雲が上がると明日は雨だ」、これには「奥の山の晴れ」と「次の日の雨」という、かなりの距離感があるところを互いに結びつけたところに鋭い気づきがあって、面白い。逆に例えば、「植物に栄養がやった場合とやらない場合を比較したところ、やった方が2倍以上の成長を記録しました」、これはいくらデータに基づいての証明・実験であったとしても、なにも面白くない。科学技術とは往々にしてこういうものだ。

まとめ:

これらの例はいずれも典型的に主観の働きである。いずれも先ず基本的状況を提示し、次いでこれと「逆」の関係にあるひねった状況を出して、相互の一種の矛盾、普通はあり得ない掛け合わせから笑いを取るという構造になっていることが分かる。そして、「元素」たる個々の状況でなく、「逆」も含めた全体が、主観的に笑えるか否かの対象になっている。ということは人の主観の起こりや気づきの構造を見るには、蓋然論理よりももっとプリミティブなスキームが必要かもしれない。また蓋然論理とアナログ集合と完全にペアでないかもしれない。

#### 46、アナログ数字と新たな地平

智慧ある他者とのやりとり、これが自分を大いに啓発してくれるのは、自分とは違う気づき、つまりアナログ数字の打ち方をされていて、それがたとえその本人にとっては日常のものであろうとも、私には新たな打ち方及び数字構造を教えてくれているからなのだ。以下に例をあげる。

- ・善行をつんだオランウータンは次の生は人間→いや深海魚に生まれたほうが幸せ。
- ・サンデル教授の「正義」はキリスト教→いや問いかけはユダヤ教のラビと同じだ。
- ・内橋克人は当然に原発推進だろう→いや原発安全神話を批判する本を書いている。
- ・たまに気が途切れるのですよ→たとえ健康体であっても気は途切れるものです。
- ・エネルギー問題の切り札は電力自由化だ→安くなればみんなジャブジャブ使うだけ。
- ・お釣りを余分に貰うと必ず返す立派な人→そういう人に限って札束を猫ばばする。
- ・やることに矛盾がない立派な人→そういう人は人間臭さがないのでつまらない。
- ・おぼれている人を見たらすぐに手を貸しましょう→自分の安全の確保が先だ。
- ・家族ではすべて打ち明けましょう→秘密は打ち明けない方が家庭は幸せだ。
- ・放射線被ばくが怖いよ→良くラドン温泉やラジウム温泉に行くね。
- ・赤子を轢くとは許せん運転手だ→酔っ払いオヤジが寝ていて轢かれ、馬鹿だなあ。

・ウソをつくのはいかんよ→ウソも方便、火宅の人の例えあり。

これらはいずれも、最近のブログ友達とのやりとりなのですが、これらのやりとり、回答に一々感心するのは、質問の段階では気付かなかった地平での回答であり、それぞれに固有の知恵を感じるからです。

この「感心」という主観の作用の構造のカギには、その回答を思いついた時の回答者の、当該するアナログ数字の打ち方が深く関与している。智慧ある他人のアナログ数字の打ち方が自分のそれとは全く違っていて、新たな構造の気づき、ヒントとなるのです。

#### 47、もしこの世界が2次元なら

我々の住む世界は3次元です。「なぜ3次元か」と言う問いは昔からあり、まだ解決を見ていない問題なのですが、私は以前に、これは初期のビッグバン直後のクオーク等の分布によるものであり、もし分布が異なれば、2次元でも4次元でも、また次元のない非晶系でもありうることを指摘しました：

ではもし、我々の住む世界が2次元だったらどうなるのでしょうか。もちろん色々なことがありえますが、本日は、「理論というものの偉大さと限界を考える」言う観点から、この2次元宇宙における物理モデルのあり方について見てみます。理論は一般に、現実問題の複雑さに対しては理想化され過ぎているものの、全体の見通しを与える指針としては極めて有力であると言う認識になっています。

理論と言え、流体力学のポテンシャル流れや固体力学のポテンシャル歪問題は、コーシー・リーマンの関係式を通して複素関数論に置き換えて扱えることは、我々3次元に生きる者にも良く知られています。そして更には調和関数論とも深い関係にあります。

ところが理論は、武器としては極めて強力なものの、抽象的・理想的すぎて現実問題には限界があることも良く知られています。事例で見てみましょう。現実の複雑さとは、例えば気象学を扱うのに地形の高低や海陸の境界の複雑さが考慮されていないと言う意味での複雑さはもちろんですが、複素関数論の結果は2次元複素平面でのみ成り立つ理論式なので、現実世界が3次元であるという観点からは、たとえ形状が簡単であってもそのままでは直接適応できないと言うもどかしさがあるわけです。

この点に関しては「それなら複素関数や調和関数を3次元に拡張すれば良いのでは



ないか」と言われそうですが、残念ながらこれは少なくとも現行の数学の枠組みではできないことが証明されています。簡単に言いますと、3次元に拡張しようすると商演算が定義できないことが群論で示されているわけです。

ですから我々の世界は、たまたま3次元であったがゆえに、理論解が当てはまりにくい状況にハマっちゃっているわけですが、まあ仕方ないとしか言いようがありません。その代わりと言う訳ではないのですが、最近の計算機の長足の進歩により、かなりの現象が数値解析で分かるようになりました。最近の天気予報が昔に比べると格段に良く当たるようになっているのも、ひとえに数値予報のおかげです。言い換えればそれまでの理論と経験による予報は、極めて隔靴搔痒だったわけです。

まあ、現にそうなのだから仕方ないですね。ただ残念なことに、理論の高邁さに比べて数値予報に係る根拠、つまり離散化過程は高校生でもわかるような幼稚なものなのです。端的に言えば下らないものの方が良く使えるわけです。こうなってくると、「頭の良い人はどんな仕事をすべきか」という哲学的問題が湧いてくるわけですが、これはこれで大きな問題を含んでいるので、別途にします。

### 48、ニート・フリーターに理あり

日本だけでなく世界中そうなのかもしれないが、いわゆるニートやフリーターが問題になっている。働くべき年齢になっても働こうとしない、十分に働いていない、あるいは世の中に寄与しないことをしているといった若者たちが増えているということだ。まあ、働かなくて済んでいられると言うのは一方で社会がそれだけ成熟した証しでもあるが。経済学者によると、彼らが働かないことによる経済的損失は、総GDPの結構数%に及んでいるという。

では、彼らが働かないことはそんなに悪いことか。あるいはどう悪いのか。まず、親の立場からは子供が引き込みりになって、不健康な上に経済的にも苦しいと言う家庭がある程度ある。これは構造上問題があるし不幸の原因になるので、心理カウンセラーとかのケアが必要だろう。

また、彼らの中には不景気等の理由によって、働きたくても働き口がないという若者が何割か居る。こう言う若者も、働き口について好き嫌いを言い過ぎる傾向はあるものの、政府等が主体的に雇用政策等の手を打つべき状況だろう。

だが私は、彼らの残りの一部に、既成社会への静かな反抗の影を見るのだ。就職するとはすなわち、彼らにとっては既にある、言わば既成服に自分を合わせることなのだ。そしてこの出来あいに自分を合わせると言うある種屈辱的な行為は、やる気のない、自分がない、プライドのない無能な人ほどたやすくできるという不条理な構造がある。自我が確立した人ほどやりにくいのだ。

それに加えて現在の既成の世の中に構造上の問題がある。今の世の中の世界標準は欧米式民主主義だ。民主主義と言えば聞こえが良いが、民主主義も自由主義も、そこから出た自由・平等・効率・正義も、すべて元をただせばキリスト教と言う独善的なカルト的一神教である。そこでは人としての自然さよりも契約と言う人工物が最優先される。

加えて先進国になるあるいは会社が儲かるための基本である技術革新と科学、これもキリスト教の派生物、今は局地的になったとはいえ共産主義もキリスト教の派生物、イスラム教だって元はキリスト教の派生物、そしてキリスト教の本質とは、建て前は別にして、「人は神の奴隷だから効率よく目いっぱいこき使え」というものだ。

要するに世の中キリスト教とその派生物ばかりで、余りにもワンパターンで本当につまらない、食えない。そして現代の日本の社会構造もこのキリスト教的な、石のように冷たいもの、人間疎外した薄っぺらなものになってしまっている。そこでは人は取り換え可能な歯車の一つにすぎない。

私は、働かない若者の一部に、特に心根の優しい若者に、この一神教のくそまじめで融通のない、何でも理屈と根拠がないと許さない、人間味のない総奴隷社会へのアレルギー反応、静かな反抗を見て取るのだ。昔の東洋には馬車馬よりも志の高い人を尊重する気風があった。そう言う意味では日本の豊かな自然に囲まれて育った若者の不自然な社会への自然な疑問符、東洋的アニミズムへの原点回帰への希求とも言える。私はこの素直な気持ちを潰したくない。

#### 49、デジタルがアナログになるとき

デジタルの典型である「数字」、0, 1, 2, 3・・・と言う子供でも習うあれですが、どう見ても「ぶつ切り」のデジタルの典型ですよ。ところがこれらがアナログになることがあるのです。

例えば、くじで良くある、「先着10名様ご招待」とかいうの、これって1番と2番の違いに比べて10番と11番の違いが天と地ほど違っていませんか？つまり、数字としては等間隔であっても、その意味するところは決して等間隔ではないのです。

やはりデジタルの典型であるお金について見ましょう。最近までうちの娘が受験生だったのになにかと物入りだったのですが、たまたま学資保険に入っていたために大いに助かっています。保険ですからもちろん月々自分が支払ったものが戻ってきただけでしかもピンはねされているのですが、それでもこの時期にまとまったお金があるのはうれしいですし、別途自力で貯められたとも思えない。つまりお金には意味があり意味がある以上はアナログだと言うことです。

おかねと言えば通貨のことを英語で“currency”と言うのですが、この単語の語源は“current”つまり「流れ」です。「流れ」は、「ゆく川の流れは絶えずして」を例に挙げるまでも無く典型的にアナログです。つまりこちこちにデジタルな欧米人でさえ、無意識的に「おかねはアナログだ」と信じているわけです。

さらに時ととき（漢字とひらがな）、ギリシャ語ではクロノスとカイロスですが、これも「今がときだ、かかれ」などと武将が言うひらがなの「とき」は、時計が刻むデジタルな時の流れにアナログなくさびを打っていると考えられます。

このように無味乾燥なデジタルも、そこに意味を持たせるとアナログになります。ただし、「とき」を読んだり先人の「技を盗んだり」するには、時間を物理的に知るのと違って、実技と熟練とコツが要ります。主観と知恵と経験の問題だからです。そして蓋然論理がこれら「コツの伝承」に役立つようになるし、そのように理論整備して行かないといけないと考えています。

（本論は以上です）